
プラッティ・ドール

伊川侑子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラッディ・ドール

【NZコード】

N8432T

【作者名】

伊川侑子

【あらすじ】

ドローシャ王国のスラム街に住む駆け出しの魔女ネネは、ゲテモノ好きで常に無表情な変わった女の子。そんな彼女がスラムの有名な不良・ルーカスに恋をして・・・?

ネネの奇天烈な愛の奔走記とそれに振り回される（可哀そうな）人々を描いたダークでコミカルな恋愛ファンタジー（下ネタ・グロ多め注意）

1話　～恋愛と魔女の甘糸（前編）

本作品はヤンキーな魔女の続編っぽい内容となります。
単発で読んでも問題ありません。

ぐつぐつ煮えたぎる紫色の液体をかき混ぜている少女は、隣の部屋で土下座をしてこの男と師匠の会話を聞きながら沸き出る泡をぽいつと見つめていた。

「お願いします！
魔女様の薬が無ければ息子が死んでしまいます！」

「そんなはした金で売るような薬はないよ」

帰りな、としゃがれた声で無慈悲に言つ老婆。
すっぽりと身体を覆つ黒いローブ、フードの下から覗く長い鉤鼻。
その出で立ちは魔女そのものだ。

男は諦めないとなく、床に頭を擦りつけて頼み込んだ。

「私の持つている財産なら全て差し上げます……ですから

」

「なればお前の臓器で手を打つてやるつか

」

「ぞ・・・臓器・・・」

田を見開きながら震える男は、声をひっくり返しながら呟く。

息子の命と自分の臓器を頭の中で天秤にかけているのだろうと、少女は無感情に思いながら火にかけていた鍋を覗く。

良い頃合いだ。

満足気にこくりと頷き、瓶に詰めてある田玉を鍋の中に放り込んだ。途端にムワッと緑色の煙が沸き起こり、少女の居る部屋の方に視線を寄こした老婆が呆れたように首を横に振る。

「ネネ、田玉を入れるでないと何度も言つたらわかるんだ」

ネネと呼ばれた少女は無表情のまま空になつた瓶に視線を落とした。ふわふわのウエーブがかかつた水色の長い髪、琥珀を薄めたような黄土色のトロソとした瞳。肌の白さも相まって、全体的に色素の薄い彼女の名前はネネ。若く駆け出しの魔女である。

師匠の元に弟子入りしてから早8年経つが、ネネの特殊な性格の所為か、彼女の魔女としての実力には非常に偏りがあった。

「・・・だつて田玉好きなんだもの」

間違つた方向に。

一連の会話を聞いて混乱した男は真つ青になりながら手を合わせる。

「お、お、お助けくださいー・どつか神のー慈悲を!」

「神頼みするくらくならさつと臓器を渡すんだね」

「しかし・・・・・」

「イヤならひとつと帰んな」

おら、と足で蹴りながら男を家の外に追い出した老婆。紫からだんだん縁に変ってきた液体の様子を見て、ネネはクフフと分かるか分からぬかくらいの小さな笑みを漏らした。

ドローシャ王国のスラム街、そこにネネと師匠は2人で暮らしていった。

魔女としてかなりの稼ぎがあるにも関わらず、ネネの師匠はあえて小さくボロい小屋に好んで住みついている。

ネネも最初は治安が悪く不潔なスラム街を嫌つたが、住み慣れれば

どつてことはなかつた。何より国に干渉されないこの地を、今では出るのが惜しいと思っているくらいだ。

とは言つても、あくまでここはスラム街。

弱肉強食の世界で勝負に負ける弱い人々に未来はない。

道端に立つのは胸元を大きく開いたドレスを着た娼婦。少し路地裏に入れば転がつてゐる死体。瘦せ細つて物乞いしてゐる子どもたちも多い。

四季を知らせる縁は少なく、道端を歩く人々の目は濁り切つてゐる。そういう場所なのだ、ここは。

ネネは籠いつぱいの野菜を持ち、今日の夕飯はビーフシチューにしようと足取り軽く帰路についていた。

しかし道の向いの側からこちらへやって来る男の姿に、彼女はパタと足を止める。

赤銅色の綺麗な髪に血を連想させる深い赤の瞳。

彼を見た瞬間ネネは手に持つた籠を落としてしまつたが、彼女の瞳は男に釘付けになつたまま。

いろいろと足元を転がる野菜には一氣に人が集つて盗まれてしまつた。

けれどもそんなことはどうでもよかつた。

今のネネの世界には自分と赤銅色の髪の男しかいないのだから。

しかしジロジロと見られていた男は、不機嫌に眉をしかめてネネを片手で突き飛ばす。

「見てんじゃねえよ」

尻もちをついた痛みよりも突き飛ばされた方がショックングだった。
いい意味で。

彼の取り巻きの一人の男がネネを見て焦り出す。

「あ！頭、コイツ……いやこの方は魔女のネネ様ですよ！
暴力ふるひやまずいですって！」

「知るか」

手下の助言を一蹴した彼はネネに田もくれず去つて行つた。

ネネは走つて自宅へ帰り、乱暴にドアを開けて部屋の中に飛び込む。
珍しく機敏に動くネネを不審に思つた老婆は問つた。

「どうしたんだい、ネネ。
何かあつたのかい」

「う・・・運命の出会い・・・なんて・・・」

ネネは空っぽの鍋に田玉やトカゲを適当にぶち込みながら、鼻歌を
歌わんばかりの「機嫌つぶりで呴くよ」に言つ。

「血・・・もられないかな。
骨でも・・・爪でもいい。」

本当は田玉がいいんだけど・・・あんな瞳こすりと見つめられたら
私・・・」

ぐりぐりと鍋を高速で搔き混ぜながらキャップ類を染めるネネとは対照的に老婆は悲鳴を上げた。

「鍋！それ以上は爆発する――つ――！」

その日、魔女の家の天井が吹き飛んだ。

赤銅色の髪の男、ルーカス・ブラッドは廃墟の中で数人の手下と共に潜伏していた。

左腕に走る生々しい傷は彼が堅気の人間ではない証拠。

「頭！ロドス組がやられた！」

移動した方が・・・！」

廃墟に駆け込んできた手下は焦つたように言つたが、ルークは大きなイスに座つたまま静かに否定する。

「今焦つて動けば奴らに居場所がばれる、落ち着け」

「でも・・・」

まだ何か言い足りないのか、今度は別の手下が言いにくそうに口を開いた。

「どうした？」

「それが・・・客人が・・・」

困惑した表情で手下がゆっくりと顔を向けた方には、場にそぐわない水色のふわふわした髪の女の子。

彼女は男だけのこの場で物怖じすることなく、無表情のまま歩みを進める。

ルークにはその子見覚えがあつた。

先日道ですれ違つたときに突き飛ばした魔女だ。

「ふん、仕返しにでもしにきたのか？上等じゃねえか」

「・・・違います」

女の子は人形のようにどこか作りものめいた雰囲気を持っている。肌の色は白を通り越して透明に近いのでは、と思うほど。ルークは彼女が自分を訪ねてきた理由を探ろうと、目を細めて観察

したが全く感情が読み取れない。それほどに無表情で温度のない女の子だった。

「何しに来た

「私はネネ、です・・・

自分のボスを守るべく手下たちは、水色の髪の女の子、もといネネを武器を持って囲んだ。

しかし彼らの顔は一様にして険しい。それは彼女が“魔女”であることを知っているから。

「もう一度問う、何しに来た

「あなたに会いに来ました。ルーカス・ブラッドさん

「要件は

「会いたかったから会いに来た・・・それだけですよ

ネネが一瞬だけ笑ったかもしない。しかし表情の変化は注視していないと分からぬほど僅かなものであった。

ルークは射殺すような鋭い視線を向けて殺氣立つ。手下たちも手に汗をかきながらも剣や槍を握りしめる。

「俺に何の用だ

「あなたに・・・お願いがあります

ネネは服の中から短剣を取り出し、切つ先をルークに向けた。

宣戦布告、そう受け取つたルークは常人なら泣いて逃げ出すほど殺氣でネネを睨んだが、やはり彼女の表情に変化はない。

武器を取り出したといつのに全く動かない手下たちに怒るルーク。

「おい、なにやつてんだ、殺せ」

「いやいやいや……ダメですって……」

「魔女を傷つけたら死罪ですよ、死罪……」

それくらいの常識はルークだって知つてゐる。

つたく、と役に立たない手下に毒づき、再びネネに視線を戻した。

「そんなに俺を殺したいなら魔術で殺せばいいじゃないか」

「殺すなんて……そんな……私の身にあまる光榮です……。私はただ、あなたに私の子供を産んで欲しいだけで……」

手下は一斉にずつとけた。

「あ、間違えました。

あなたの子供を産みたいだけで……」

「間違えすぎだろー！」

誰かのヤジともれる突つ込みが飛び。

ネネは無表情のままポツと顔を赤らめた。表情に変化はないのに照れているのが分かり、ルークは頬の筋肉をヒクヒクと引きつらせる。

「冗談に付き合つつもりはない。出て行け」

「冗談だなんて・・・本気です」

「おい、誰かこいつを摘まみ出せー。」

ルークの命令に顔を見合わせる手下たち。

魔女は世界でもここドローシャにしか存在しない貴重な存在。さらには神の子とも言われ、傷つけるだけで国庫に手を出すのと等しい犯罪として扱われる。つまり死罪なのだ。

本来ならスラム街に居ていいような人ではない。

とつとう手下の一人が根を上げた。

「無理つすよお~。魔女つて魔術使つんでしょう?」

「どうするよ、蛙に姿を変えられたら

「お、おそろしい・・・」

「情けない」

大の大人の男がたつた一人の小娘も摘まみ出せないとは。ルークは苛立ちながら血のような赤い瞳でネネを睨んだ。

「お前と関わるつもりはない」

「ネネです」

「お前と関わるつもりはない」

ネネの言葉を無視して同じ言葉を繰り返す。そこには微塵も迷いはなかつた。

ルークにとつてネネは鬱陶しい存在、ただそれだけ。

「結婚してください」

「お断りだ」

「遠慮せずに・・・・」

「嫌だと言つている」

「じゃあ恋人になつてください」

「剣を突き出しながら言つ台詞か！」

とつとう痺れを切らしたルークは立ち上がりつて叫んだ。彼の言う通り台詞と行動が噛みあつていない。

ルークと手下たちは頭を抱えてどうしたものかと困惑する。

「そもそもなんで俺なんだ」

「あなたが好きだからです」

「だったらもうヒマシなやり方を考えろ！」

「じゃあやり方を変えたら恋人になつてくれますか？」

ネネは少し考えた後、再び服の中から何かを取り出した。ルークたちは嫌な予感しかしない。

「俺のどこがいいのか知らないが無理だ」

「私が作ったマムシとタランチュラの血入り、特製トカゲ酒です。主に・・・夜系のお薬です」

「いるかつ！..！」

反射的にルークはそれを叩き落とした。

「頭あ、俺怖いっす・・・」

「俺も・・・」

泣く子も黙る不良の男が泣きそうな顔をしている。

割れた小瓶から漏れた赤い液体は、じゅわじゅわと煙を立てながら床に広がり水溜まりを作っていた。

「他を当たれ、俺には無理だ」

真面目に心の底から言い切ったルーク。無論本音である。

「嫌です・・・、あなたじやないと嫌。」

ネネも本気だ。再び剣の切先をルークに向けた。

「・・・恋人になってくれるまで離れませんから。

お風呂に入るのもトイレに行くのも付いて行きますから・・・」

もはや告白を通り越して脅迫である。剣を取り出した時点でそうではあったが。

何を言つても絶対に引かないだろうと呑みたルークはドスンシッとい

スに腰を下して明後日の方を向いた。

じつは、ナタリーネを諦めさせることができるのであるつか・・・。

2話 まずは形式から

ネネは宣言通りルークの傍を離れなかつた。

立ち上がり歩きだしたルークは、後ろからついて来るネネに足を止めて恨めしそうに見遣る。

「本当にトイレまでついて来る気が」

「あ、大丈夫です、慣れますから・・・」

「何にだ！」

「のままでは本当について来そうだ。中まで。ルークは歯を噉んで苦々しげな声を出す。

「本気でついて来るなら」ここで斬り殺す

「恋人になつてくれるんですか」

「聞こえなかつたのか、斬り殺すと言つてるんだ」

殺すといつ言葉さえもネネには愛の言葉にしか聞こえない。

ルークを例えるなら獰猛な肉食獣だらう。

彼の纏う気配は他人を決して寄せ付けない。そして一度牙を向けばその恐ろしさを思い知る前に命を落とす。

鍛え上げられた肉体も、鋭い瞳も、全ては獲物を狩るためのもの。

彼の醸し出す色気を讀えながらネネは呑気にそんなことを考えているうちに、ルークはさつとビニカへ消えて行ってしまった。

ぽつんと残されたネネの後姿がどこか寂しげで、2人のやり取りを見守っていた手下たちがついつい慰めの言葉をかける。

「あ、あの、魔女さん、頭は気が短いから・・・」

「そうそう、あまり気にするものじゃないぞ」

あはあはと必死に笑顔を作る手下一同。

しかしネネの表情をよく見れば頬が赤く染まっていた。殺すと言われて喜んでいたらしい、何故か。

言葉を失って遠い目をする手下たちに、ネネは振り返って無表情のまま問う。

「ルーク様に女がいるの？」

「いや、いないとは思うけど・・・」

「おいバカ！ 何正直に話してるんだよー！」

ここで恋人がいると知れば諦めてくれるかもしねいのに、と。しかしネネはフリフリと小さく首を横に振る。

「・・・いいのよ。

その方が・・・手の打ちようがあるし・・・」

どんなど、と一同は心中で突つ込んだ。

「何をしている・・・その女は？」

新しい人物が廃墟に現れ、一斉に彼を見た後に軽く頭を下げる。彼らの行動からそれなりの地位の人物だと分かるが、ネネは直観的にルークと同じくただ者ならぬ気配を感じていた。

黒い髪に細くつり気味の目、鷹のよくな深い黒茶の瞳がギロリとネネの姿を捕える。

「お前は・・・荒廃の魔女の弟子だな」

「・・・あなたは」

「名乗る義務などない。

お前には関係のない場所だ、ただちにここを去れ

「嫌・・・」

何があつても離れない、無表情ながらに決意が満ち溢れていた。彼は険しい顔をしてネネを睨みつける。

「魔女ともあらう者が何に執着している

「ルーク様」

「ルーク様？」

「彼に何の用が？」

「・・・好きだから」

黒髪の男は少しだけ眉間のしわを緩めた。
しかし次の瞬間には先ほどよりさらに険しい顔をして、ネネの白く
細い手首を掴んだ。

「・・・余計ダメだ」

そのまま腰に腕を回してネネは俵担ぎされたまま外に追い出される。
地面に下してもうえず無言で彼は歩き続け、着いた先はネネの家だ
った。

「もう2度と関わるな」

「・・・」

ネネは何も言わずに見つめるのは去つて行く男の後ろ姿。彼女は諦
めたのか、踵を返して自分の家の扉を開けた。

ガラスの瓶に薬を詰めている師匠がネネの帰りを迎える。

「おや、追い返されたのかい」

「・・・」

ネネは返事をせず扉を閉め、部屋の端っこにちょこんと座つた。
表情も行動も人間らしくないネネは、まさに入形さながら。しかし
そんな彼女にも心はあるのだ。好きな人に拒絶されて嬉しいないわ
けがない。

老婆はククツと喉を鳴らして笑う。

「お前が取り乱すなど珍しいではないか、なあネネ」

「やうやく……かな」

「やうやくあるやうやく。」

「歸臣……自分がどうあればいいかわからなことやうじ、どうすればいいの……？」

老婆は手を止めて床をぼんやりと見ているネネの方を向いた。

「どうも……相手が悪すぎるだらう。」

本来なら魔女は王に嫁ぐ身だというのに……」

身分もお金もない男に懸想するなど、老婆は呆れたように言つて続ける。

「ネネ、忘れてはいけないよ。スラムの勢力に手を出してはならん。我々はあくまでも國に謀反を企む連中を監視する役目を賜つた、監視者。」

内情に首を突っ込んでいかんのだ」

「無理」

「やうやくと考えようかー。」

即答したネネにクワッと口を大きく開く老婆。しかしネネに全く反省している様子はなく、ますます心配は積もつていく。

老婆は「ゴホン」と咳をして、仕切り直しだと優しく語った。

「ネネ、わたしはもう老い先短い。

おそらくあと10年生きられればいい方だ」

神の恩恵を受けるドローシャでは寿命が1万年。25歳で見た目は止まり、寿命を迎える何十年か前に老いが始まる。

師匠も老いが始まつた時点で寿命を迎えるだろ」ことは一目瞭然だつた。

街では同じ若さの人間で溢れかえつており、ネネのような若い子や老婆は珍しい。

老婆は瓶の蓋を締め、今までの自分の人生を振り返つて感慨深げに言つ。

「約1万年、長い人生だ。そのほとんどをスラムの監視者として生きてきた。

わたしの死後は弟子であるお前が次代の監視者となるのだぞ」

「嫌だ」

「もう少し考え方ようか！

・・・まったくこの子は、マイペース過ぎて敵わないよ

またもや即答したネネ。

老婆は手に負えないと頭を抱えてかぶりを振つた。

ドローシャは神の恩恵を受けており、総じて非常に豊かな国である。神が王を選び国を治めているが、このスラムだけは例外であった。元々スラム街とは治安が悪く貧困層の多い地を指すが、ドローシャのスラム街は自ら民が築きあげた無法地帯と言つていいだろ。歴史を遡れば、ドラック中毒者・違法入国者・その他の事情を抱えた者たちが集まり、国の干渉を受けぬように街の周りに高い壁を設けた。

兵士がいないこの地は何もかも自由である代わりに、自分の身を守つてもらえる組織は存在しない。そういう約束のもとでスラム街は継続されてきた。

ここでは勢力がいくつかのグループを形成し、抗争がひつきりなしに起つていてる。

その勢力は大きく分けて3つ。

ひとつは大男ノロゾイの率いるグループ。
もうひとつはロドス率いるグループ。
そしてルークの率いるグループである。

要するに、ルークは自由の地ドローシャのスラムで猿山のボス的地位にいる人物なのだ。

「いいか、これからはノロゾイ組の繩張りであるB地区を捕りにいく

黒髪に釣り目の男、ジェルダは数百の手下の前で高らかに言い放つ。ルークはジェルダの隣に座り込み、静かに聞き入る手下の様子を伺っていた。

「ノロゾイは鼻が利く、油断するな。

各自武器の用意を、C地区の裏通りからB地区に流れ込む。

決戦は明後日の夜明けと同時にだ」

いいな、とジェルダの問いかに拳を上げて叫ぶ手下たち。

同じく無言で拳を突き上げる

ネネ。

「なんでお前がここにいるんだ！」

ちよこん、とさりげなくルークの横に座っているネネに、ジェルダは細めの目を見開いて大声を出した。

彼女は悪びれる様子もなく、無表情ながら満悦の様子でルークの肩に頭を寄せる。すぐにルークが横に移動したため、身体のバランスを崩したネネは倒れこんでしまったが・・・。

「誰か『』を摘まみ出せ」

ルークは低い声で唸るよつと叫つた。

ジェルダがすぐにネネの首の根っこを掴み持ち上げる。

黒茶の瞳と琥珀の瞳がお互いの顔を映し、互いに睨み合つ。

「関わるなと言つたはずだ」

「・・・嫌」

「諦める」

「・・・嫌」

「今は大切な時期なんだ。お前の戯れに付き合つていい暇はない。
抗争に巻き込まれて死にたいのか？」

「・・・」

とうとう顔を反らして無視したネネ。

ジェルダの額には見事な青筋が浮かび、ルークは機嫌が悪いらしく舌打ちをした。

「ジェルダ、ソレにもう構うな、計画に支障が出る」

「しかし・・・」

ドカツーと重たい音を立て、ジェルダの身体は一瞬で吹っ飛んだ。

ルークが蹴り飛ばしたからだ。

ネネの頭上を通って地面に叩きつけられたジェルダは「ぐじぐじと転がり、蹴りを受けた腹を抱えて蹲る。

息を飲む手下たち。

「誰が俺に口応えしていいと言った」

視線だけで人を殺せそうなほど獰猛なルークは例え仲間であろうと自分に逆らう者には容赦がない。

従わぬ者は去れ。それがルーク組のルールであり全てであった。

ジェルダは「ホホホ」と苦しそうに咳込んでいた。

恐れをなして震える手下とは対照的に、キラキラと瞳を輝かせてルークを見つめるネネ。彼の動きも言葉も彼女にとつては全てがカッコイイらしい。

「おい」

ルークに声をかけられたネネはふと我に返つてルークを見つめ直す。

「俺の周りをうろつくのはやめろ、目障りだ。

お前みたいなガキに興味はない」

ネネはガキだと言われ反射的に自分の胸に手を当てる。

「揉むな」

「・・・じゃあ、魔術で大きくしましょうか?」

「そういう問題じゃねえ」

ルークは再び舌打ちをして、ネネを片手だけで抱ぎ上げる。彼女のふわっとした服が一瞬だけ風に靡き、ルークは手下たちの方を見遣つた。

「後は任せる。

明後日までに小競り合いを起こすなよ」

そしてネネは逞しいルークの肩に抱がれたまま、大勢に見送られてその場を後にした。

ルークが連れて来たのは小さな小屋の2階だった。

乱暴にベットの上に投げ飛ばし、ネネの細く白い首を片手で締め上げる。

「魔女だから誰からも手を出されないとでも思ったか？」

嘲笑うかのような笑みを浮かべたルークは、さらに手に力を込めてネネの首を締めた。

もちろん手加減はしている。もし本氣で力を込めていたら、今頃ネネの首の骨が折れているだろうから。

すぐに解放されたものの、首を押さえて苦しそうに咳をするネネ。

「本氣で殺されたくなればさつさと去れ。
魔女がスラムの争いに首を突っ込むな」

「邪魔しませんから・・・恋人になるだけでいいの」

「そつか、じゃあ何されても文句は言つなよ」

驚くほど冷たい声で言い放つたルークは、ネネの胸元のボタンを乱暴に開けた。

当然彼女の白い柔肌が現れるかと思いきや、何故か大口を開けて「シャーーー！」と威嚇している“ヘビ”が。

ルークの視線とヘビの視線が交わり、服のボタンを

「…………」

閉める。

「なんだベジがいるんだ！」

「……バートちゃんです」

「服の中にペツトを仕舞つた……」

ルークは我に返つて口を開いた。

こんな若い女に本気で怒るのは馬鹿らしい、と思い直したようだ。

彼は舌打ちをして不満を残しながらも諦めたようだ。

「もう好きにしろ」

「恋人でも……いいんですか？」

「好きにしろ」

ネネの口端が一ミリほど僅かに上へ向いた。

いそいそと服をボタンを外し始め、間違いなくこれから事を致そうとしている彼女にルークが大声でストップをかける。

「それはもういい……」

「・・・いいんですか？」

上田遣いで少し残念そうに言つネネ。ルークの額に青筋が浮かんだ。

「余計なことはするな」

「えー・・・」

「えー、じゃない」

こんなガキ抱けるかと心の中で吐き捨てるルークに、ネネは無表情のまま頬を膨らませる。ちょっと怖い。

「とにかく、もうすぐ大切な抗争がある。
邪魔だけはするな」

「・・・わかった」

言つた傍からルークの膝にいそいそと頭を乗せたネネ。
もちろんゲンコツが飛んできて、大きなタンコブが頭に出来た。

「邪魔するなと言つたばかりだろうが・・・」

「・・・痛い」

「当たり前だ、痛くした」

恋人という肩書きで何かが変化するわけではない。ネネが押しつけた一方的な想いに、ルークの想いは一致しないのだから。
突然優しくしると言わても、ルークの性格上不可能なことはネネ

もよく理解していた。

「・・・じゃあ、手を繋ぐだけでいいから・・・」

「うるせー」

彼が興味を示すのは自分の欲望のみ。恋人らしさことをしたかったこという女の子の純粋な思いなど知つたことではない。

手を繋ぐことすら拒否され下を向いたネネは泣いていた。だが、水色の髪の間から覗く彼女の口角は僅かに上がっていた。

スラムの日常は死と隣り合わせである。

ルークは血が流れる腹を抱えながら、人気のない小屋へ逃げ込んだ。そこは人が住んでいる気配がなく空家のようだつた。好都合だとばかりのルークは外に敵がないのを確認して戸を閉める。

「大丈夫ですか・・・」

「・・・」

「・・・」

無言で見つめ合う2人。

誰もいないかと思いきや待ち構えたように空家に居たネネに、ルークは舌打ちと共に視線を外す。

「なんでおめえがいるんだ」

「・・・怪我・・・」

ネネは座り込んだルークの身体を見た。

服に染みついている血のほとんどは返り血だが、シャツが裂けている腹部だけは彼自身のもの。深くはなさそうだがパックリと肉が切

れでいるその個所にじいーつと見入るネネ。

「・・・おー」

「はい・・・治療しますね」

傷口に見入り残念そうに治すと言つたネネに、ルークは突つ込む気も起きず彼女と反対の方向を向いて身体を横にした。ネネの白く小さめの手は、幹部を覆い隠すように指を開いてゆっくりと上に乗せられる。

ルークは傷口が少しづつ暖かくなるのを感じた。

「・・・これくらいしかできませんが・・・」

しばらくそのまま時間が経ち、ネネは手を引っ込めて申し訳なさそうに言つた。

傷は多少良くなつたが、やはりまだ完全に治つたと言えるほどではない。血を大量に流したこともあり、ルークはそのままじつとしていた。

「本当に治つてんのかよ」

「自然治癒力を高めただけなので・・・治りが早くなるのは確かですけど・・・」

傷そのものをぢりじりしたわけではない。

通りでまだ痛いわけだと、ルークは鼻で小さく嗤つ。

ネネはルークが動けないのをいいこと、さらに近寄つて頬に可愛らしくキスをした。

「・・・おい」

低い声で注意されるが無視し、彼女はルークの隣に寝こもって頬を擦り寄せる。

ぴつたりと身体を寄せて満足そうなネネ。

「・・・ノロゾイ組との抗争はどうなったんですか?」

「混戦中」

短く簡潔な答えにネネは首をひねる。

「・・・まだ終わってないんですね?」

「・・・・ああ」

「スラムの歴史では・・・今まで誰も統一を果たしたことないそうですね」

ネネは独り言のように小さな声でそう漏らす。

ルークの目的はもちろんスラムの全てを支配することだらう。それを成し遂げた者はまだドローシャの歴史上に存在しない。

現在では長らくルーク・ノロゾイ・ロイドの3組が均衡を保つていたが、最近は徐々に抗争が激化して勢力図が変化しているらしい。

「お前、もう出て行け」

「え・・・」

「奴らが俺の居場所を探してる。
本気で巻き込まれたいのか」

敵はルークが負傷しているのを知っている。

彼も一時的に小屋に身を潜めただけで、敵がいつここへやって来るとも知れない。

もし見つかれば確実にネネも巻き込まれるだろう。巻き込まれるだけじゃない、ルークにとつて足手まといなのだ。

「・・・バートリちゃん、見張つててください

服の中からニヨキッと顔を出した蛇が、横に波打ちながら外に向かって出て行つた。

これで大丈夫、とネネは自信満々に言い切る。

一方でルークは呆れたように溜息を吐き、固く目を閉じて体力の回復を図ることにした。

ネネはルークと一緒にいるのが当たり前になると、“ルーカス・ブラッドが魔女を従えている”という噂がスラムで流れ、その噂がネネの師匠の耳にも届くこととなつた。

久しぶりに帰宅したネネを待ち構えていた老婆は、部屋の中央を指さしてネネを正座させる。

老婆は深いため息と共に胸の内を語つた。

「ネネ、もうあの男に付き纏つのはお止め。
魔女とは国に従う生き物。犯罪者の恋人など、自分の首を自分で絞めていふことと同じ」

「問題・・・ない」

「お前は国に携わったことがないだらうから自覚がないであらうが、魔女はドローシャ王に逆らうことができぬ。
そもそも魔女は中心の国と呼ばれるドローシャにしか生息しない貴重な存在なのだ。

神の恩恵を最も多く受けているこの地で魔女が生きる、これには非常に意味のある」と、

老婆からの説教に唇を尖らせるネネ。

今更世界の理を説かれたつて、ネネの心を動かすことはない。

「高い地位を約束されているお前が、あのよつな誰とも知れぬ男に懸想するのは国にとつて大きな損益になる。

本来ならお前ほど若い魔女なら王に嫁ぐのが慣行だといふのに・・・

・

「・・・でも現ドローシャ王にはもう魔女が嫁いでるじゃない」

「身分が高いのは王だけではないよ」

老婆はしたり顔で分厚い紙の束を取り出した。

一枚目をネネに見えるよつに掲げると、それはハンサムな男が描かれた人物画だつた。

「いひなつたら見合いでさつさと結婚相手を決めた方が話が早いだらうつ。

案ずるな、面喰いのお前のためにそこそこ見られる男を集めた

「え・・・」

「ほら、この男なんぞどうだ?
文官でなかなか頭が切れる」

最初に勧められたのはネネと同じ水色の髪の、中世的な顔立ちの男性だ。

「・・・弱そう。

ルーク様はとても強いもの

「これならどうだ、貴族出身の兵士だ」

「・・・マッシュは嫌。

ルーク様みたいに太すぎず細すぎず、程よく質の良い筋肉でないと

「おすすめだ、これならよからう」

「・・・ルーク様みたいな色気がない」

「これならー！」

「・・・男らしくない。

ルーク様みたいに野性的でなきや」

「じゃあ、この男ー！」

「・・・なんだかバカっぽい。

ルーク様は知性にも溢れてるから

「ならば、剣が強くて太すぎず細すぎず程よく質の良い筋肉で色気が
があつて野性的で知性を併せ持つ男！…

レオナード陛下ならどうだー…」

「じゃん、と派手に取り出したのはドローシャ王の絵。

確かにネネの注文はすべてクリアしていると言つていいし、世界で
最も美しく強い男性である。

「・・・獣猛さが足りない」

「お前は結婚相手に何求めてんだあ…」

ブチ切れた老婆は絵をぶちまけて怒った。ドローシャ国内から集めた選りすぐりのお見合い相手のすべてにダメ出しされるとば。ネネの注文が多すぎるのも原因のひとつであるが、ヒビのつまい、ネネはルーク以外の男を認めることはないのだ。

ネネは無表情のままそっぽを向き、視線を逸らされたのが気に食わなかつた老婆はネネの顔を掴んで自分の方へ無理やり首を捻る。

「よいか、お前はもう一度この世界がなんたるか、魔女とはどんな存在なのか、そこから勉強し直しだ。
わたしは買出しに行つてくるから、その間に全て田を通しておくように」

宣言通り財布と籠を持って小屋を出て行く。

老婆が去つた部屋で、渡された本に視線を落としたネネは小さく息を吐いた。

『世界には中心がある。その中心には神がいると言われ、そこに位置しているのがドローシャ王国であり、他国では見られない様々な恩恵を受けている。例えば魔女が生まれるのも国内のみで他国には存在しない。また、神の宣託により王が決められるのもこの国の特徴である。人々の寿命も中心に近づけば近づくほど長く、国内では約1万年だが隣国では約9千年、遠く離れた国では6千年と大きな違いがみられる。神の住まう世界の中心、それが我がドローシャ王国である。』

子どもから大人まで耳がタコになるほど聞かされた有名な記述。その後はいかに魔女がドローシャにとって貴重な存在なのだとが、

神に選ばれた王がいかに優れているかといつ、ネネにひとつは非常につまらない文章が続く。

魔女がこの国だけでなく世界にとつても有益な存在であることはネネも理解している。

その存在は自由の地であるドローシャのスラムでも無視できないほどであり、魔女だからといつ理由だけで誰にも危害を加えられることはない。

あのルークでさえ、ネネが魔女であるから殺すこととはしないのだ。

魔女、スラム、監視者。

様々な言葉がネネの脳内を駆け巡るがやがてどうでもよくなつた彼女は、老婆が絵をぶちまけたように本を放り投げて立ち上がつた。いちいち教えや地位に縛られるなんてスラムで育つた人間らしくない。

この恋を否定されるくらいなら、堂々とここを出て独り立ちしてみせよ。

満足気にコクリと頷いたネネは、家中の自分の荷物を集めてトランクに文字通り押し込んだ。

最後に窓辺で昼寝していたペットの蛇を、胸元から服の中には仕舞う。

家から出て振り返れば、そこには8年間近くお世話になつたボロ小屋。ここでネネは魔女としての修行に励み、師匠と共に生活してきた。

爆発した思い出もあれば、火事にした思い出もある。その度に師匠があたふたと駆けまわり修復を繰り返してきた。小屋をぶつ壊した

当の本人であるネネは傍観していただけだったが・・・。

「・・・やつなら」

風にかき消されてしまいそうなほど小さな声でネネは呟き、正面を向いて自立への一歩を踏み出した。

「ああああああー！わたしのヘンクリがああああーーー！」

師匠のヘンクリと共に。

4話 祝杯は敵襲とともに

見事ノロゾイ組を打ち倒したルーク一行は、アジトの一つで祝杯を上げていた。

好き勝手に安い酒を煽る手下たちは対照的に、ルークは独り離れた所で椅子に座りワイングラスを煽っている。ありきたりな行為でもルークには王者としての品格と威厳があった。いつにも増して彼の機嫌がいいのは、強大な勢力であるノロゾイ組を倒したからだろう。

「乾杯！…あら、飲め飲め！…」

瓶ごと傾けて一気に飲み干す男達。大口を開けて豪快に笑い、お酒の消費量も早い。

そして彼らの視線の先にあるのは、独りで酒を楽しんでいるルークだ。

「さすがルーク様！」

あのノロゾイと一騎打ちで勝つちまつとはなー」

「見たかよ、最後の一撃。あれどうやるんだうつな

「だがよ、ルーク様について来て正解だぜ。

見ろよ、あのヨダレが出そうなほど色気

「俺ルーク様になら抱かれてもいい！」

「だよなあ。

でも俺たちみてえな色も糞もねえ男相手にしないつつの！」

がははははは、と下品に笑う手下たちに混じりて、うんうんと頷く
ネネ。

「い、いつの間に・・・・・！」

「居たのかよ！」

「神出鬼没だなあ、おい！」

いきなり現れた魔女に、心臓をドキドキ言わせてため息を吐く一行。ネネは驚かせてしまったと少し申し訳なさそうに話す。

「……いえ、ルーク様関連の猥談をしていたから、つい……」

「猥談じやねえ・・・つてか興味あるのかよっ！」

無表情のまま「クリと頷くネネ。欲望に正直である。

・・あ、飲む？

ネズミの肝臓と鳥の目玉酒

ネネが差し出したのは、瓶に目玉が入った緑色の液体だつた。ふかふか浮かんでいる目玉が生々しく恐ろしい。

いい歳した大人たちが泣きべそをかきながらゴキブリ並みの速さで散り散りに逃げて行く。

ぼつんと中央に取り残されたネネの身体が、急にふわりと宙に浮いた。 ジュルダに首の根っこを掴まれて持ち上げられたからだ。

「貴様、まだルーク様の周りをうろちょろしておつたか」

虎視眈眈と獲物を狙う鷹のような鋭い視線がネネを貫く。不快感と嫌悪感を露わにしたジュルダは、ルークと同じく普通ならば逃げ出したいほどの殺氣が込められていたが、図太いネネにはまったく効果がない。

「・・・恋人、ですから」

「ルーク様はお前のようなガキに興味はない」

ガキと言われ反射的に自分の胸に視線を落とす。

「そういう意味じゃない！！

ルーク様はいすれこのスラムを支配する御方！！

お前の相手をしている暇などないんだ！！」

「えー・・・」

「えー、じゃない！

さつさと出て行け！」

大声で怒鳴つていた所為で吹き抜けの天井いっぱいに声が響き、ア

ジト中の人々の視線を集めてしまった2人。

静かに飲んでいたルークも黙つていられなかつたのか、ネネの方を向いて顔を険しく歪めながら口を開いた。

「また来てたのか」

「・・・はい。

あ、飲みますか？」

「ゴツン！！

田玉酒を掲げるとジェルダから頭突きを食らつ。ネネの小さな頭から小気味いい音が鳴り、一瞬脳みそが揺れたような感覚があつた。

「そんな下卑た物をルーク様に勧めるな！」

「・・・痛い・・・」

「ジェルダ、やめろ」

制止をかけたルークにジェルダは驚いてネネを解放する。

すとん、と地面に足を着いた彼女は掴まれてくしゃくしゃになつた襟を正す。

「なぜ止めるのです」

「小娘相手にムキになるな

バカが、と吐き捨てるルーク。

敬愛する主に庇われたネネをジェルダは恨めしそうに見遣つた。

ルークの為を思つてネネを注意したのに、逆に自分が咎められるの

は納得がいかない。

「良いのですか？』

『こんな 頭のネジ一本外れた人形みたいなものを傍に置いても』

「いい男つてのは寄つて来た女を上手く利用してやるもんだ」

ペコー、とはやし立てるような口笛が飛び交う。

「さすが頭！」

「男前！」

「てめえら煽るな！」

ジェルダは大声を出して手下たちを注意するが、皆一様にネネを傍に置くこと自体は反対していなかった。ネネが魔女であろうが怪物であろうが、尊敬するルークが決めたことに逆らうことはない。ルークがイエスと言えば全てがイエスなのだ。

本来ならば、ジェルダも。

しかし彼はイエスを言つことができない。

まるで人形のように表情がなく、ゲテモノをこよなく愛する魔女。容姿も強さも完璧であるルークの恋人に相応しいか、それは言わずとも解るだろ？』

奥歯をギリギリ鳴らして睨んで来るジェルダを無視し、ネネがいそいそと田玉酒を服の中に仕舞つたその時だった。

急にアジトの外が騒がしくなり、皆は武器を手に取つて即座に警戒

する。

外を覗いた手下が顔を真っ青にして叫んだ。

「敵襲です！！

見張りの奴ら全員殺られちまつてゐ……困まれてます……！」

「落ち着け」

「……ルーク様、このお団子食べてもいいですか？」

「お前はもう少し慌てろ」

敵襲。

ノロゾイ組を倒したばかりこのタイミングは、疲弊しているところを狙う魂胆だ。

現に2大勢力の抗争で多くの手下を失ったルークにとって、最悪のシチュエーションともとれる。手下たちは一様に顔を隠しくして不安そうに武器を握りしめた。

「情けない面をするな、たいしたことじやねえだろ。

戦力を一点に集中して包囲網を崩す」

「……わかりやした……」「

ルークの指示で困惑から闘志漲る表情に変わった手下たちは、指示通りに同じ方向へ走つて剣を振りかざした。敵はすぐそこまで迫つている。

「ジェルダ、先に行け」

「わかりました」

ジェルダも大剣を持ち駆けだして行き、椅子に座つたまま動く様子のなかつたルークもやつと立ち上がりつて腰の剣を抜いた。そして視界の端に映つたのは、のん気に団子をもじもじと咀嚼しているネネ。

「・・・・つたく」

無視して行きたいところだが、ルークは仕方なくネネを小脇に抱えて歩き出す。アジトを出れば想像していた通りの混戦状態になつていた。敵味方入り混じり、四方から金属音が響いてくる。

「はつ、舌噛むなよ」

自分を囲んだ敵を見て鼻で嗤い、ルークはそう言つと不敵に笑つた。

片手で敵を薙ぎ払うルークの剣技は凄まじく、ネネを小脇に抱えていたため絵になるかと言われば微妙であつたが、スラムの住人が名前を聞いただけで震えあがる理由を知ることのできる程度の働きをしたルーク。見事に敵の包囲網を破つたものの、その先に待ち構えていた別の集団の攻撃を受けて皆ははぐれてしまった。

追いかけてくる敵を巻き、身を隠すために入つたのは民家の屋根裏。手入れされているのかそこまで汚くない。

ルークは人の気配がないことを確認してから、荷物のように抱えていたネネを下ろす。

「・・・ロドスにノロゾイの残党か、通りで数が多い」

機嫌はいつになく最低である。

ロドス組の襲撃を受けただけでなく、ノロゾイ組の残党と組んでルークの首を取りに来たのだ。

せめて今晚くらいはゆっくり飲んで過ごしたかったものを。

「・・・皆、大丈夫でしょうか・・・」

「殺られたんならそれまでの奴だつたつてことだ。
弱い奴に興味はねえ」

仲間を見捨てるような発言はシビアだがここはスラム。ルークの言

うとおり弱い者が生き残れる世界ではない。

ネネはぎゅっとルークの腰に抱きつき、無表情ながら嬉しそうに頬ずりしている。

機嫌の悪いルークは心底鬱陶しそう。

「・・・離れる」

「せつかく・・・2人きりになれたのに・・・」

「「」」

ベリッと引き剥がされたネネはまるで子犬のような瞳で訴えた。 2
人きりになつたのだからもつと構つてほしい、と。
しかしルークは大きなため息を吐いて視線をそらす。

「もう少し表情変えられないのかよ。人間と居る気がしねえ」

喜びも悲しみも顔にほとんど表れないことを指摘されたネネは自分の顔を手で触つて首を傾げた。

「人間っぽくない・・・ですか?
欲求沸きませんか? 性的な」

「ない、ついでに欲求も沸かない」

「じゃあ、ダツチワイ 「ガツン!」

ゲンコツを喰らつたネネは頭を押されて蹲る。

「つたく、もういい。

とにかくお前は黙つてろ」

「…………」

忘れてはいけないのは2人とも侵入者だということ。
下の階ではこの家の住人がすやすやと眠つていいことだらう。あまり物音を立てると起こしてしまつ。

敵に追われている身であるルークはもちろん警戒を怠るわけにはい
かず、はつきり言つてネネを相手にする暇はないのだ。

「邪魔だ、寝る」

「誘われた?」

キヤツと頬を染めて喜ぶネネに、もう一発ゲンコツがお見舞いされ
た。

「“独り”で寝てろ」

「…………はい」

ぱっこりと盛り上がつたタンコブを抑えつつ、ルークの膝を枕にし
て横になるネネ。

ルークはもう注意する気も起きず、されるがまま黙り込む。

「……ルーク様は寝ないんですか?」

「……お前は追われてる自覚がねえのか

苛々した口調で返答するルーク。

2人とも寝てしまえば敵に見つかった時、抵抗することもなく殺されてしまうだろう。

当然見張りが必要になるが、ネネに任せると不安なのでルークがやるしかない。だからルークはネネに寝ろと言つたのであるが、ルークが戦っている間腕にぶら下がつたままお団子を食べていたネネに彼の意図が理解できているか否か・・・。

「抱き枕が欲しい・・・」

理解できていないようだ。

ルークは膝の上に頭を乗せているネネにデコピングをし、盛大にため息を吐いた。

炎が建物を覆い、パチパチと弾ける音を立てて全てを燃やし尽くす。広い部屋で目を覚まし身体を起こすと、霞む視界に白い女性の足を捕えた。

透き通つて見えるほど肌の白い女性はくるくる回る。こんな熱い場所で何が楽しいのか、クスクスと降つて来る楽しげな笑い声と鼻歌。『…………』

何かの言葉を耳元が囁かれるが、その言葉を聞き取ることができない。

重く自由の利かない身体はズルッと腕の支えを失い崩れ落ちる。

すると、彼女のぬるりと生暖かい手が自分の顔を掴み、無理矢理上を向かされた。

見えたのは口角を上げている顔。

その唇はゆっくりと吐息がかかるほどに近づき、そして

急に視界が開けると、田の前には小奇麗な天井があった。ルークは汗だくの額を乱暴に拭い、先ほど見た夢の氣味悪さに眉間に皺を深くする。

コンコンと控えめなノックと共に部屋の扉が開き、入つて来たネネの姿を見て全てを思い出したルーク。

ノロゾイ組との抗争に勝ち祝杯を上げていたところに、ロードス組の襲撃を受けて民家の屋根裏部屋に隠れた。その後陽が昇ると共に2人は小さなアジトの一つである娼館へ移動したのだ。

一睡もしていなかつたルークはすぐに就寝し、現在に至る。

「・・・目が覚めたんですね」

ネネはルークの顔をのぞき込み、すとんとベットの端に腰を下ろした。

無言でじろじろ寝起きの顔を見られるのは不快だと、ルークは寝がえりを打つてネネに背を向ける。

「ジエルダはまだか

「まだ来てないです。

・・・あ、でも他の方なら何名か・・・

チツと小さく舌打ちをするルーク。

そしてネネが何か口を開きかけたとき、再びノック音が部屋に響いて扉が開いた。

やつて来たのは胸元が大きく開いたドレスを着ている女性。金髪巻き毛のグラマラスな美女だつた。

「お目覚めかい？」

彼女はこの娼館のボスとも言える女性で、名はルージュラ。ルーク組の手下の一人であり、匿う場所を提供している1人でもある。

「水持つて来たよ」

彼女の手にある盆の上に乗せられた水差しとコップを見たネネは、今までになく素早く立ち上がりつて盆を受けとろいと手をかけた。しかしルージュラは手に力を込め、奪い取られまいと自分の方へ引き寄せる。

寝起きのルークの傍で行われている無言の女の戦い。お盆を制すれば、ルークに水を差し出す権利を得ることができるのだ。

お盆を引っ張り合つてゐるうちにそれはあらぬ方向へ飛んで行き、バシャッと水音を立ててルークはずぶ濡れになつた。

額に青筋が浮かぶルークにルージュラは顔を真つ青にして慌ててタオルを探し始める。

「い、ごめんよルーク。

このチビが邪魔するから・・・」

「・・・人の所為にしないでもらえますか、オバさん」

睨みあいで火花が散るとはこのことか。

ずぶ濡れのルークそつちのけで2人は睨み合い、両者ともタオルを掴んで再び奪い合いが始まった。

しかしそのタオルは最終的にルークが無理やり奪い取り終わりを告げる。

「出て行け」

「でも・・・」

ルークに睨まれたルージュラは何か言いたそうに口を開きながらも、顔色を悪くしてすこすこと出て行つた。

残つたネネはぽつんと立ち尽くしてルークを見上げる。

「お前も出て行け」

「・・・はい」

扉へ向かつたネネは名残惜しげに一度だけ振り返り部屋を出て行つた。

ルークはタオルで濡れた髪を拭き終わると、ベットの傍に置いてあつた自分の剣を手にする。

スラムを支配するまで、残つた強大な勢力はあと一つ。

ここで手をこまねいでいる暇などない。

ルークは抜いた剣の刃を眺めると、剣を素早く鞘に納めた。

ルークに部屋を追い出されたネネの前に仁王立ちして居るのはルージュラ。

「まったく、あんたの所為で追い出されちまつたじゃなか。
久しぶりに会つたというのに、まったく相手してくれないなんて」

ぶつぶつと文句を言われるがネネは全くの無視を貫く。
ルージュラはさらに不機嫌顔になつてネネの鼻に人差し指を突き付けた。

「だいたい、なんでルークの恋人がこんなへなちょこりんのガキな

んだ！

魔女っていうのは美貌で品の良い生き物だと聞いていたのに

「・・・知ってるの」

「当たり前だよ。娼館はスラムの情報の溜まり場さね。

荒廃の魔女の弟子が赤獅子の恋人になつたことくらいあたしたち娼婦は知つて当然だ」

赤獅子？と無表情のまま首を傾げるネネに、ルージュラはそんなことも知らないのかい！？と大きな声を出して詰め寄る。

「だつて・・・興味ないもの・・・」

ルークを知る前までスラムの情勢に全くの興味を示さなかつたネネ。当然ながら勢力争いには疎い。

「呆れたね、まつたく。

ほら、おいで」

ルージュラはネネを少し離れた部屋に案内しお茶を出した。他の娼婦を纏め上げる器を持つてゐる彼女は、なんだかんだで非常に親切だ。色気を前面に押し出している風貌にも関わらず、その内面は割とさばさばしているらしい。

ネネがお茶を飲み始めると、ルージュラは向かい側に座つて話し始める。

「赤獅子ってのはね、ルークの異名さ。あだ名みたいなものかねえ。昨今のスラムは3大勢力で成り立つてた。赤獅子ルークス、黒鳥口

ドス、猿王ノロゾイ、この3つでね。

でも一昨日にルークがノロゾイの首を取つただろ?」

「ぐり、とネネは頷く。

「だからは今日まぐるしく勢力図が変わつてね。

ノロゾイの残党がロドスに加わつちまつたものだからや」

当然ノロゾイの手下たちは自分の頭の首を取つたルークを恨んでいる。

一方ロドス組はスラム統一まであとルークの首を取るのみ。双方の利益が一致したわけだ。

ルージュラはふう、とため息を吐いて唇を歪めつつ続けた。

「まあ、この通りあたしらは赤獅子の一員。ルークがスラムを支配しちまえばいいんだけど、難しいだろ? ねえ。

スラムはこの不法地帯という土地柄、今まで多くの有名人を排出してゐる場所。灰色の殺し屋シルヴィオからノースロップ王国の革命家エヴァン、殺戮王子ステファーまで様々。

これからもいろんな奴が台頭してくるだろ? し、例えスラム統一を果たしてもルークの道のりは平坦じやないよ。覚悟しどきな」

ネネは紅茶をテーブル置き、ルージュラの皿を見てゆつくりと口を開く。

「・・・貴女は、ルークが好き?」

「あーっはははははは! 何言い出すんだい! 」

大きく口を開けて女性らしからぬ笑いをするルージュラ。テーブルを手でバンバンと叩き、豪快に腹の底から笑い声を出した。ふーっ、と最後に大きく息を吐き、身を乗り出して肘を突く。

「あのね、魔女ちゃん。

スラムの女は恋をしないの」

「・・・なんで？」

「恋に溺れて生きていけるほど、『』は生易しい世界じゃないのさ。特に、女子供にとつてはね。だから恋はないの、自分を守るために。金を出さない奴に抱かれるような真似はしないよ」

「じゃあ・・・ルーク様は？」

ルージュラはルークの名前を聞いて片眉を上げる。

「そりやあいい男に好かれれば『』はいいさ。ルークほどの権力があれば、生活には困らないし。でもそれだけだ。

あんたみたいなちつこいのを恋人にするなんて意外だつたけど」

ネネはちつこいと言われて反射的に自分の胸に手を当てる。

「いや、胸じやなくてね・・・。

まあ、一番変なのはあんたの顔かねえ」

「・・・変？」

「当たり前だろ、なんでずーっと無表情なんだい。
まるで人形みたいだよ」

「表情・・・ある、たぶん」

「どこがだ」

「ある・・・たぶん」

ルージュラは「まあいいさ」と呆れた様子で話を流した。

「魔女ちゃんは一応ルークの恋人って話だから追い返はしないけど、あんたは目立つんだ。

あまり派手なことはしないでおくれ。

あんたが人の目に触れればルークを匿つてるってバレちまう

「・・・わかった」

「それから、服の中でペットを飼うのはおやめ

ルージュラは視線を反らしてネネの胸を指差す。

ネネの胸元からは、ニヨキッとヘビが顔を出していた。

娼館の朝は遅い。

営業を始める少し前に部屋を用意させたルークは、手下を集めて酒を煽つた。

「これだけしかいねえのか」

この娼館へやつて来た手下はたつたの10人余り。襲撃を受けたアジトから一番近いのだが、他の潜伏場所へ逃げた手下が多かつたらしい。

手下の一人が返事をして説明する。

「へい、ジエルダの旦那が先鋒隊を連れて東の方へ行つていたので、たぶんそちらかと・・・。

ただ、戦闘中にばらけていたので一所にはいなかもしれません」

「つたく、めんどくせえ」

別々の潜伏場所に居るならば集めるまでに時間もかかるし情報の伝達も遅い。疲弊したところへの襲撃で大打撃を受けたルーク組にとっては、少しでも早い段階で戦力を確保しなければならないため、喜ばしくない現状である。

特にルークの右腕であるジエルダがいない事は大きな問題だ。

「あの、頭・・・。それより・・・その・・・」

手下たちは言い辛そうに「口どり」もつながらルークの横を控えめに見遣る。

視線の先に居るのは頭の上に蛇を乗せたネネの姿。もう何がしたいのかさっぱり理解不能である。

「無視しろ」

「でも・・・」

「無視しろ」

とても氣まずい空氣の中はつきりと言い放ったルークの言葉に頷く一同。

手下たちは極力ネネを視界に入れないよう氣をつけながら話を続けた。

「・・・襲撃で確認された敵の数は約150、失った味方の数は約50ほど」

「大した数じゃねえな」

「へい、しかしノロゾイの残党を組み入れたロドス組の他、新たな組織が形成されつつあるとの情報もあります。

現状で我々は圧倒的に不利で・・・」

バシャヤツと水音とともに手下が水没しになる。

ルークが杯の酒をかけたからだ。

「俺の前で弱音なんぞ吐くな！」

「・・・す、すみません・・・」

慌てて布を探し酒を拭う手下たち。

酒に濡れた男はルークを苛立たせてしまつたと、顔を真つ青にして頭を下げた。

日が傾き始めた頃、ガヤガヤと部屋の前の廊下が騒がしくなり、扉が開くとともに煌びやかに着飾った女たちが入って来る。部屋に香水の香りが漂い華やかな空気になつた。

スラムでは高級な部類に入る娼館だけあって、女のレベルもなかなかのものである。それぞれが個性的ながら美しい。

「さやあ！ ルーク様だわ！」

「やつぱりいらしてたのね！」

きやいきやいと黄色い声を上げながらルークに群がりつとする娼婦たち。 しかし

「<氷>」

「いやあああああーー！ルージュラ様ああああーー！」

ネネの頭の上に居る蛇を見て一斉に逃げだした。

「「「（い）ためだつたのか・・・（」」」

納得する手下たち。再び一気に静まり返った部屋。言い表しようのない氣まずい空気が漂つたが、ルークはまるで何事もなかつたかのように続ける。

「とにかく、戦力確保が第一だ。
早急にジエルダを探せ」

「「「へーーー」」」

「俺は武器商人を当たるが、後はお前らに任せん。
あまり派手に動くなよ」

ルークは腰に差した剣を鞘（）と引き抜き、剣先を地面に着けて肘を柄頭に置いた。

ネネは空になつたルークの杯にお酒を注ぐと、何を思ったのか無表情のまま頬を染め、キャッと顔を背けながら言つ。

「ルーク様と結婚したらネネ・ブラッドになりますね」

ブフオツ！！

突然の珍言にルークはお酒を勢いよく吹き出して、先ほど酒漫した手下が再び犠牲になつたのであつた。

ネネの容姿は非常に整っている。

他の要素が強烈なために忘れそうになるが、僅かに幼さの残っている顔は愛らしく好ましい。肌も病的なほどに白く透き通つており、娼婦のグラマラスな色気とはまた違つ魅力を持っていた。

ネネ自身はその容姿を、まったく言つていひほど生かせていないが・・・・。

「ああああ、最悪だああ

先ほどルークに酒をぶっかけられた男は頭を抱えてうずくまつた。ネネの余計な戯言でルークの機嫌がさらに悪化し、手下たちはハつ当たりという名のとばつちりを受けたのだ。

当の本人たち2人が去った部屋で、他の手下たちは彼に憐みの視線

を送る。

「運が悪かったとしか・・・」

「だな、今は大変な時だからさ。ルーク様も虫の居所が悪かったんだろ」

「魔女様には逆らえねえしなあ」

腕を組んでうんうんと頷く手下たち。

例えルークの機嫌を損ねる原因がネネにあつたとしても、魔女である彼女に危害は及ばない。もちろんルークの暴力や暴言もそれなりに受けているだろうが、マイペースなネネは全く意に介さないので効果は薄い。

一方でとばっちりを受けている手下たちはもうにダメージを食らっているのだ。不満は募るばかり。

しかしルークにその不満を言つわけにはいかず、こつして仲間内で愚痴を溢しながら酒に走る。

「ルーク様もルーク様だ。

こんな大切な時期に女囮つようなマネしねえ人だと思つてたんだけど・・・」

「仕方ないだろ、魔女なんだし」

「魔女つたつてよお、負傷させなきゃ問題ないだろうが。

あの唯我独尊のルーク様が傍に置いておくほどの価値あんのか?」

男の口は止まらない。

尊敬し命を預ける主にとついた虫。あまりいい気分ではないらしい。

しかし手下の中で際立つて可愛らしく容姿の男が反論する。

「魔女つてのはそりやもつ特別な存在だ。」

本気になつたらスラム全体を吹つ飛ばせるくらいの魔力しこ生き物だ」

「やけに詳しいな、お前」

「そりや、スラムに来る前は王妃仕えしてたからな」

「んだどうー?」

「マジかよー」

驚く手下たちの前で彼は苦笑いする。

「ちょっとやーな騒動に巻き込まれて責任取らなきゃならなくなつちましたんだよ。」

せつからHリース「ース走つてたつてのこ」

「王妃仕えつて何やつてたんだ?」

「将軍」

「ブフオツと誰かが噴き出した。」

将軍と言えば軍のトップ、しかも王妃軍の将軍ともなれば、国政の中でも指折りの権力者だ。

「おいおい、なんで將軍様がスラムの下つ端不良なんかになつたんだよ」

「だから責任取らなきゃならなかつたんだって。

30年前にノルディ戦争あつただろ?」

「あー・・・そんなのがあつたようななかつたような

スラムは完全とまではいかないが、外界とかなり遮断されているため外の情報には疎い。

ノルディ戦争とはドローシャの近隣で起こつた最も記憶に新しい戦争であるが、スラムの住民である彼らにはあまり知られていなかつた。

「ノルディ戦争つてのはオーティス王国とベルガラ王国がノルディつて土地を巡つて争つた戦争のことさ。

ドローシャが仲裁に入ろうとしたがすつとこどつこい、ドローシャの王妃軍が何故かオーティスを攻め入つたんだなあ。しかも王妃の命令でもないのに

まるで第三者のような語り口をしているが、彼はオーティスに進軍した張本人である。

「なにやつたんだよ、お前・・・」

「俺も騙されたんだって。

当時の王妃軍全責任者であるクロード様が『王妃の危機だから指示はないが進軍する』って言つてたから、すっかり信じ込んだんだよ。だけど後から聞いた話だとクロード王子がベルガラと内通してて?

もちろん王妃の危機だなんて嘘っぱちで？しかもオー・ティスの王妃がうちの王妃と親友で？

そりやもうてんてこぼみこ、後の祭りつてやつでれど

自嘲氣味に言い切つた彼は瓶に口をつけて酒を飲んだ。

他の手下たちはまあ、と感心するような呆けるようなため息を吐く。

「難しい」とはよくわからんが……災難だつたなあ」

「 motifs たぐだ。」

つてわけで、王妃に仕えてたから魔女がどんなもんか知つてるんだ。
俺に言わせればおっそろしい化け物みてえなもんだな。

オーテイスの死人を蘇らせたり、ベルガラの王宮を一瞬で吹き飛ばしたり」

魔女が怖い。

その気持ちは徐々に他の物にも感染していき、皆は一様に顔の筋肉を強張らせた。

他の男が苦笑いをしてフォローをする。

「で、でもさあ、それは王妃に限つてのことだろ？」

うちの魔女さんはまだ若いし……そんなに人間離れしてゐるわけじゃねえさ」

「…………わたしが、何か？」

氣配無く突如現れたネネに、一同はまるで幽靈でも見たかのような

反応をした。

ネネは相変わらずの無表情のまま首を傾げる。

「…………猥談？」

「いや違つかいら……」

手下が突っ込むとネネは先ほどルークに酒浸しにされた男の方を向き、手に持っていた黒い液体の入ったコップを差し出す。

「あの……これ……さつきのお詫びの品。わたしの所為で、お酒かけられちゃったから……」

男は反射的に身構え、皆はコップの中をまじまじと見た。ネネにはいろいろと、それはもういろいろと前科があるため、手下たちは多少学習している。

ネネから物を受け取るべからず。

差し出された男は顔を引きつらせて訊ねた。

「な……なんですかね、これ……」

「「「」」

わっと声が上がる。

「コーヒー や紅茶は庶民にとつて特別な時しか飲めない高級品。スマムにおいてはほとんどと言つていいいほど流通していない貴重品だった。

「 いただきます！」

「一ヒーの誘惑に負けた男はパツと笑顔になつてコップを受け取り、一気に傾けて喉を鳴らしながら飲み干した。もつたいないとヤジが飛ぶ中、急に男が固まつて動かなくなる。

まさか薬か？と緊張が走るが、理由はすぐにわかつた。コップの下の方に沈んでいる、何かうねうねした白い物体。

「い・・・いもむし・・・・」

男は白目をむいてひっくり返つた。

7話 私を利用して

娼館が爆発した。

「一体何事だい！！」

ルージュラは頭を抱えながら大声を出す。

敵に居場所を悟られないために移動したルークたち。手下らは情報収集のために全て外へ出ており、幸いにも娼婦たちに怪我はなかつた。

しかし前触れもなく突然破壊された娼館は修復しなければ住めない有り様。

「全く怪我がなかつたからいいもののー！」

一瞬ネネと視線が交わったが、彼女はすぐに顔」と逸らす。

「姉さまどうしよう…・・・

「仕事、じばらぐできないわよね・・・

不安気な症状でルージュラを見上げる娼婦たちに、ルージュラは優しく肩に手を置いて頷いた。

「大丈夫、お前たちはあたしの知り合いの娼館に行くといい。
そこで働かせてもらひな」

「姉さん！！」

「ルージュラ様――――」

一気に抱きつかれ団子状態になつたルージュラは、もみくちゃになりながら「それよりも」と話を戻す。

「なんで爆発なんてしたんだい？」

敵襲じやないみたいだし・・・」

その時再びルージュラとネネの視線が交わるが、ネネがすぐに顔を背けた。これは明らかに怪しい。

「お前がああああ――！」

ぐわし――とネネの小さな頭が驚掴みにされ、ネネはわたわたと手をばたつかせた。

「お前か、お前だらう、お前以外考えられない！
なんで爆発させたんだ！！」

「・・・・・・・・・暇だつたから」

ボソリと聞こえるか聞こえないくらいの声で言つたが、ルージュラの耳にはきつちりと届いている。
両頬を引っ張り間抜け面になつたネネの顔。

「あんたのお陰であたしは今日から無職だよ」

ルージュラの手が離れると引っ張っていた頬が赤く染まっているのがわかった。

さすさすと小さな手で摩りながら淡々と答えるネネ。

「それも運命・・・」

「お前が言つたな!!」

例え原因が分かつたとしても爆発した娼館が戻つて来るわけではない。

ルージュラはネネとの不毛な会話を早々に諦め、思考を現実的な問題へと移す。

「仕方ない・・・」うなつたら修復するしか・・・

「・・・ルーク様、眠たい・・・」

「あんたはもうちょっととゞ省しなーまつたく・・・」

言葉も出ないと呆れるルージュラ。

一方で我関せずで話を聞いていたルークは立ち上がり、眠そうに田を擦るネネを小脇に抱えた。

「ルージュラ、娼館は手下に直させや。

それまで身を隠しておけ」

ルージュラはぽかんと口を開けたまま去つていくルークを見つめた。

手下に直せせる。

それはつまり、ネネの仕出かした問題をルークが処理するといつこと。

言いえれば、ルークがネネを自分の物として扱つてゐるといつことである。

ルークの気前がいいわけではないが、自分で落し前をつける性質だ。ネネを自分の領域であると認めているからこそ、彼は修復を申し出た。

なんだかんだ言いながら、彼はネネを傍に置くことを認めている。誰にも心を許さず受け入れなかつた“あの”ルークが、だ。意外すぎて言葉も出ないルージュラは、言い様のない感情に顔をだんだん赤らめて半開きになつたままだつた口を動かす。

「そ・・・そ・・・へえ・・・」

「ルージュラ姉さん、私あの子怖い・・・」

「なんだか不気味よね」

「そうだねえ・・・」

娼婦たちは表情のないネネを思い出す。何をしても何を言つても感情を表に出さない、まだ少し幼さを残している魔女。

ルージュラは赤らめていた顔に手でパタパタと風を送りながら難しい顔をした。

「確かに・・・少し気になるね・・・」

ルークは微睡んでいるネネを小部屋の隅っこに下ろした。
すぐに立ち去るうとしたが、ネネが服の袖を掴んで放さない。

「・・・おい」

「もつちゅうつとだけ・・・」

「ダメ?」と上目使いでお願いするネネに、ルークは眉間の皺と盛大な
溜息で答えた。

仕方なく隣に腰を下ろすと、ネネはさりに強く袖を握りしめる。

「うつらうつらと頭を揺らしつつ、眠そうな声で話し始めた。

「あの・・・怖い人、私が探しめしょつか・・・？」

怖い人はジェルダのことであらうと見当をつけたルーク。困窮しているルーク組の為を想つたネネの申し出に、ルークは鼻で嗤つて即座に拒否する。

「余計なことをするな」

ネネの中では自分の力を拒否された悲しさと自分を利用しないルークへの感動が渦巻く。非常に微妙な気分だ。

「・・・利用していいのに」

小さく零れた言葉。

ルークにならば利用されても構わない。例えそこに自分への愛情がなくとも、例え利用し尽くした後に捨てられたとしても。ルークが自分を必要としてくれる、それはネネにとつての喜びなのだから。

「必要ない」

占術を使えばジェルダの居場所も簡単に知ることができるだろ？。呪術を使えば敵を簡単に殺すことができるだろ？。

しかし、ルークはそれをしない。

「・・・どうして？」

「俺は得体の知れない力を頼らなければならないほど弱くねえ。

欲しいものは自分の力で手に入れてみせる」

もつ寝るとでも言いたげに、ネネの頭の上に乗ったルークの大きな手。その手の重みと温もりを感じて、ネネはゆっくりと瞼を下ろした。

「でも・・・嬉しい・・・。

力を求められなかつたのは初めてだから・・・

魔術を使うことのできるネネは、ずっとずっと“魔女”といつ役目を求められてきた。

師匠には魔術の上達を求められ、病人には薬を求められ、国には魔女としての存在を求められ・・・。

誰かに必要とされるのは幸せなことかもしれないが、必要とされているのは魔女であつて“ネネ自身”ではない。

ネネは自分の存在意義を気にするような性質ではないが、それでも初めて力を求めなかつたルークの存在が嬉しかつた。

そう、彼は最初からネネを魔女として扱つていなかつたのだ。すれ違つたネネを突き飛ばし、すり寄つて来るネネを拒んだ。

「“いんな風に”生まれたこと、後悔はしてません・・・でも、できるなら・・・」

もつと欲しいものがある。

魔女としての膨大な力と権力よりも、もつと喉から手が出る欲しい

ものが。

「・・・生まれや存在を超越したものが欲しい」

魔女としての運命を逆らつて、魔女では絶対に手に入らないものが欲しい。

それを人は欲張りだと言つかもしれないが、素直なネネの本心だ。

ルークは何も答えず赤い瞳で見下ろしていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「氣味悪い薬やペットはそのためか」

「いえ、あれは趣味です」

今までの眠たそうな声色が嘘だつたかのよつにきつぱりと答えたネネ。

ルークは手を細めてネネの頭の上に置いていた手に力を加えた。

「うー・・・重い・・・」

「お前の仮面にも大分慣れたな・・・」

最初こそ人形のようで氣味が悪かつたネネの無表情も、ずっとネネに付き纏わされて一緒に居たため慣れてしまったようだ。

しかしやはりネネの表情が崩れたところが見てみたいルークは、ネネを見つめながら少し考え込む。

じつと見つめられたネネは首を傾げた。

「・・・なんでしょ、う~」

「いや、・・・早く放せ」

ずっと掴まれていたままの袖を振り払おうとしたが、未だにネネの手はしつかりと握りしめている。ネネは放せばルークが行ってしまふことがわかつていたため、ここで放そうとしない。

「・・・嫌です」

「放せ」

「嫌」

いつもの言い合いが始まってしまい、ルークは盛大な溜息を吐く。ネネはピコンッと何やら提案が浮かんだらしく、袖をひっぱりながら少し早口で提案する。

「じゃあキスしてくださいたら放してあげます」

「・・・はつ」

乾いたルークの笑い。

「してくださらぬなら放しません。死んでも放しません」

ネネの決意は固く、ルークは仕方なくネネのピンク色の唇に自分の唇を押し当てる。

「 もう ・・・ 」

き？

ネネから奇声が聞こえ、ルークは怪訝な顔をしてネネを見下ろす。ネネは大きな目を見開き、自分の口を両手で押さえるとものすごい速さで反対側の壁まで後退った。

だんだん真白だった顔が赤く染まっていくのがわかり、ルークは噴き出して笑いを噛みしめる。

あのネネが顔を赤くして照れている。何を言つても何をしても無表情で、鬱陶しいほどに積極的なあのネネが。自分から服を脱ごうとしたり平気で誘つたりするあのネネが、たかが触れ合うだけのキスで顔を赤くして動搖している。

「 くつ ・・・ 」

さらに笑われたのが恥ずかしかったのか、可哀そくなぐらいに真つ赤になつたネネ。

そして

逃げた。

普段あれだけ積極的に受け身になると恥ずかしがり。ルークは笑いが止まらず、しばらく小屋に押し殺したような笑い声が響いた。

ネネは顔の熱を冷まそうと夜の街を彷徨つていたら……敵に捕まつた。

敵達は額に脂汗をかきながらも、見事に捕えた魔女に歡喜する。

「やつたつす！ きっとアーニキも喜ぶぜー。
これはいい取引の材料になるー。」

「本当にここのな“ちんまい”のが赤獅子の女あ？ 間違えじゃねえのか？」

「間違いない。

水色の長髪と黄土色の瞳……これが荒廃の魔女の弟子ネネだ。あんまりいい噂は聞かないがな」

「魔女つたらそれだけで傍に置く価値がある。
こんなんでも赤獅子にとつては大切に違ひねえぞ」

ネネは抵抗するのも面倒なので黙つて聞いていたが、散々な言われようである。

男だらけのむさ苦しい敵のアジトは、非常に簡易な造りの小屋。冬には隙間風が入つてきくるほどボロボロなところだった。

彼らがルークの敵であり、ネネを利用してルークを陥れようとして

いのちは明白だ。

ネネはさつとどこかの場所から出てこなかったが、抵抗するのが非常に面倒だとこう理由で動こうともしない。

「じつあるよ、これ

「とつあえず手足を縛ろつ。魔術とやらを使われたら面倒だ。傷つけるなよ、国に殺されるぞ」

魔女を傷つけたら死刑。

その恐怖に男達は喉を鳴らし、ロープを持ったまま突っ立っている

ネネを見た。

「・・・・・」

「・・・・・」

「やつぱり無理だつて！…なんか睨んでる…」じめじめ見て
る…」

見られていのだけでも妙な威圧感を感じた男の一人が根を上げる。持っていたロープを他の男に無理やり渡したが、その男も嫌だったらしい別の男にロープを無理やり押し付けた。

順次ぐるぐる回つて行くロープをよそにネネは放つておかれている。

「お前がやれよ…」

「やだよ…お前がやれよ…」

「・・・・・

暇すぎて言葉も出ないネネ。

そう言えば眠いなあと欠伸をしながらロープの行方を見守った。

最後に回つて来たらしい男は、この中では下つ端なのか、他の者に押しつけることができずにおろおろと狼狽している。

「え・・・ええ・・・・・・僕がやるんですか？」

「ほら、行けよー。」

ドンッと背中を押され、彼は深く息をして覚悟を決めるとロープを強く握りしめてネネを見つめた。
じりじりと慎重に近寄つて行き、ネネの腕を掴もうとしたところで事件が起きる。

掴まれそうになつた左腕の袖から蛇が顔を出し、近寄つて来た彼の腕を舌でチロリと舐めたからだ。

生ぬるいヌルッとした感触に彼は飛びあがる。

「ひいいいいいーーー！」

「おいー・どつしたー！」

「だめだ、こいつ泡吹いてる・・・・・

「クソッ！やはり魔術か！」

「魔女・・・・なんて恐ろしい・・・・・

男たちは勝手に魔術だと勘違いしているが、ただペットの蛇が少し舐めただけ。それでも随分と驚いたらしい可哀そうな彼は、ひつくり返つて意識を失つたまま泡を吹いていた。

「一体こいつに何をした！？」

氣迫のある声で問われ、親切にもネネは答える。

「・・・私じやない。バー・トリちゃん・・・」

ほら、と服の中に手を突っ込んで取り出した蛇に絶叫する一部の男達。

「やめやめ。」とちに向かうなよ。」

一方で冷静な男達は冷めた目で慌てふためく仲間を見遣る。たかが蛇ごときでスラムの不良が驚いてどうする、と。

「落ち着け・・・。」

お前

話しかけられたネネは別の男の方へと振り向く。

「…にか？」

「ここに連れてこられた理由はわかつてゐるだろ? 大人しく従う気がないなら魔女でも容赦はしない。」

俺達はスラムの不良なんだ

国など恐れない、そう言つた男はしっかりとネネの目を見据えた。彼の言葉で目が覚めたのか、他の男達も顔つきをしっかりと変えてネネと対峙する。

「・・・では私は何をすればいいの？」

「大人しくしている。

もうすぐアニキがこちいらにいらっしゃる。時期に命が下りるだろ？

アニキとは彼らの親分のことらしい。

手下たちの人数や性質から、どうやら大した組織ではなさそうだ。

ネネは眠氣から田をコスコスと擦りながらその場に座り込む。

「おい、大人しくなつたぞ・・・」

「何考えてやがるんだ」

黙つて従うネネに様々な憶測が飛び交うが、本人が一番何も考えていないことに気付かない敵達。

しばらくすると、彼らの親分と思われる人が小屋へ入つて来る。

「こいつが例の魔女か」

「へい！間違いありやせん」

真っ黒の髪に真っ黒の瞳。容姿は案外どこにでもいそうな感じで普通だつた。ルークと比べたら丸とすっぽんだなあ、などとネネは失

礼なことを思いながら彼を見上げる。

彼は值踏みするかのよつこにネネの頭上からつま先まで見回した。

「ふーん・・・魔女ねえ・・・。

お前、魔術が使えるのか

「ええ、もちろん」

「じゃあ今こいこでやつてみせる」

まるで曲芸扱いの命令。しかしネネはあっさりと承諾する。

「何でも構わないなら・・・」

「ああ、いいや」

「・・・じゃあ鍋と火を用意して」

わざわざ敵の目前で披露してくれるらしいネネに、未知の魔術を間近で見られる敵達は緊張を高めていく。

手下が用意した簡素な鉄鍋を火にかけると、ネネは近くにあつた飲み水を鍋の中に少量流し入れた。

「鳥の田玉と」

服の中から取り出した小瓶に詰まつた田玉。それをひとつだけ鍋の中に放り込む。

いきなりのグロテスクな光景に先ほどまでの期待は一気に打ち碎か

れ、引きつった表情になる一行。

鍋に入っている水分と一緒になつた田玉は、とろんと溶け出して水となじみ始めた。

「蛙の足と・・・」

別の場所から取り出した小瓶から、蛙の足と思わしき物体が鍋の中へ。

「蜘蛛の内臓と・・・」

別の場所から取り出した小瓶の材料が加わる。

「ヒルの皮と・・・」

別の場所から (以下省略)

後ろから「おえつ」と吐き気を催す音が聞こえたが、ネネはお構い

なしに続けようとしたところで、とうとうストップがかかる。

「おい！これが本当に魔術なのか！？」

敵の親分はお怒りの様子だ。

ネネは小首を傾げる。

「なんでもいって言つたじやない・・・」

言つた。確かに言つた。

しかし想像の斜め上を行つたネネの行動で、彼女が鍋へ材料を入れるたびに敵達の顔色が悪くなつていいく。

「」たなの魔術じゃねえ！」

「ええええ・・・」

「えええ、じゃない！何を作ってるんだ！」

「何つて・・・」

ネネはぐつぐつと煮えたぎり始めた地獄鍋をチラミし、視線を元に戻す。

「・・・・・なんだろ！」

「ボソッつて言つてもダメだからなーちゃんと聞こえたからなー！」

自分でも何を作っているのかわからなかつたらしいネネ。

「たぶん・・・面白劇的な・・・」

「もういい！魔術はいいから！」

てめえは赤獅子との取引材料にするー。」

てめえら、こいつを縛れ！と命令が飛んだ。

もつ氣味の悪い魔術を見たくなかつた手下たちは、慌ててロープを片手にネネに近寄る。

しかし・・・

「ああああああー！なんかきたあああー！」

「蛇！？いや蜘蛛だ！！」

「げつ！」「いつ蛇以外にも服の中に詰めてやがったのか！？」

手下の1人の腕に飛び移った一匹の蜘蛛

パンツに陥った。

あ！逃げたぞ！！

ぴょんぴょんと飛び回り逃げる蜘蛛。それを追いかける男達。別の男の服の中に蜘蛛が入り込んだとき、一番大きな悲鳴がボロ小屋に響き渡る。

「さやああああああああ！」

一 落ち着け！今捕まえつから！」

上の服を脱がせて取り出す作戦のようだ。1人に男達が集つて上着を引っ張り合う。

「つたく、たかが蜘蛛一匹で騒ぐんじゃねえ」

うるせえぞ、
と親分。

彼が苛立ち始めたのを感じ取った手下は、さりに慌てて蜘蛛を捕まえようと躍起になる。

しかしいとも簡単に男達の手をすり抜けた蜘蛛は別の場所に飛び移つた。

親分の顔の上に。

突如目の前に現れた八本足。細かい毛までしつかり見え、さらに蜘蛛のきょろつとした目と親分の目が合つた。なんとも言い難い嫌悪感とショックに見舞われる。

ふうっと倒れる大きな身体。

「ああああああ……アニキいいいい……」

「アニキを氣絶させちまつなんて……」

「なんて魔女だ……」

彼を氣絶させたのはネネではなく蜘蛛である。それでも自分たちの崇拜する親分が倒されてしまい、彼らはネネの魔術を見たとき以上に真っ青になつた。

ネネは欠伸をしながらも器用に話す。

「……帰つていい?」

「「「帰つてくれ!」」」

土下座された。

9話 ルークを捜せ

敵の捕虜となるも見事に自力で抜け出し生還を果たしたネネ。言い方は非常にカッコイイが、実際はかなり大変であった。主に敵の方が。

ふらふらと眠気を堪えながら彷徨う夜のスラム。街灯すらない暗闇に包まれたそこは、夏を知らせる熱気と錆びれたような寒気を感じる風が共存している。

暑いのに虚しい、そんな光景だった。

「・・・・・どっちだつたつけ・・・・・

早く眠りたいのにルークの潜伏しているアジトの方角がわからなくなつたネネ。

いつそのまま道で寝てしまおつか、などと考えていると、逞しい腕が倒れそうなネネの身体を支えた。

「・・・・・おい

「・・・・・?

ネネを支えているのはルークじゃない。

彼女は身体を斜めにしたまま、自分を片手だけで支えている失礼な男の顔を見上げた。

黒髪に黒茶色の鋭い目。ルークの右腕であるジェルダだ。

すいぶん懐かしい顔である。

「…………おひや」

「他に懲りないのか?」

相変わらずネネに手厳しい彼は額に青筋を浮かべる。そしてさぞ
いな言い方で訊ねた。

「ルーク様はどうだ、案内しろ」

「…………眠い」

「寝るなー案内するまで寝るなー。」

眠気は最高潮に達している。

娼館の爆発後から敵に捕まっている間まで、ネネはずつと眠たかっ
たのだから。

「…………おやすみなさい」

ネネは未だ叫び続けるジーハルダの声を無視し、目を閉じて眠りこつ
いた。

むくりと起き上がったネネは田を擦りながら田の前の人物を見た。

「やつと起きたか・・・

「・・・ジ・ルダさん・・・おは・・・」

「おは、じゃない。貴様何時間寝たと思つてるんだ」

夜の道端で遭遇し、そのまま寝てしまつたネネを自分の潜伏しているアジトに連れて來たジ・ルダ。

ネネを助けようとしての行動ではなく、あくまでルークの居場所を知るためにある。

しかし・・・

「さあ、ルーク様のところまで案内しよう

「覚えてない」

ネネは場所を覚えていなかつた。

ジェルダは一瞬固まり、頭の中を真つ白にした。

「なんだと・・・？」

「最初は・・・ルージュラの娼館にいたの。だけど住めなくなつちゃつて移動したから・・・たぶんその近くだと思う」

自分が娼館を爆破したくだけ見事に省略して説明した。

「どんな場所かも覚えてないのか？」

「・・・普通の民家。たぶん、手下の人の・・・。他の手下の人たちが貴方を探してゐるから、その人たちを見つけた方が早いかも・・・」

そうか、とジェルダは顎に手を当てて考え込む。

ネネが帰り方を忘れたのは誤算だったが、ある程度の情報が得られただけでも助け甲斐があつたというものの。

「ルージュラの娼館の近く、か。
ここから少し離れてるな・・・」

「・・・おやすみなさい」

「おい、待てっ」

ジェルダはちやつかり眠りに就こうとしているネネの頭を片手で掴み制止した。

「もう十分に寝ただろうが。
まだ寝る気か」

「・・・だつて、疲れたんだもん。敵に捕まつて・・・」

「何! ? 敵に! ?」

驚いたジェルダは細めの目を見開き、彼にこくりと頷くネネ。
興奮しているジェルダはネネの華奢な肩を掴んで詰め寄る。

「敵とはロドスのことか! ?」

「たぶん、違う。

なんかうるさい人達だつた・・・」

「うるさい?」

「そう、絶叫が・・・あちこちから・・・」

「お前、何したんだ・・・」

疑うような呆れたような目でネネを見るジェルダ。敵地で何が起つたか想像つかないこともないが、想像すると気分が悪くなつて來たので止めた。

「ロドスじゃないなら問題ない・・・。
それよりルーク様との連絡だ」

「・・・魔術を使いましょうか?」

「いや、それは止める」

「何故?」

ネネに問われてジェルダは言葉を詰まらせる。まさかルークからネネに魔術を使わせないよう忠告を受けているなどと言い出せずに。

「おい、ジェルダ。アレに魔術は使わせるな」

「はっ・・・・・はい?」

まだネネが付き纏い始めて間もない頃、突然の主の命令にジェルダは目を点にして聞き返した。

「ええと、それはどういっ・・・」

「だから、アレに魔術を使わせるな、と言つている」

アレとはもちろんルークのストーカーである魔女ネネで間違いないだろう。ジェルダはルークの意図が読めず混乱する。

「何故かお聞きしても？」

「余計な真似はさせたくない。

アレが国回し者だとも限らない」

「だつたら最初から引き離せばつ・・・・・！」

ぜひそうして欲しいとジエルダは声を大きくして言うがルークは首を横に振った。

「そうじゃねえ、あくまで可能性の話だ。ただ余計なことをさせないように念を押すだけ。

俺のスラム統一に魔女の力は必要ない」

自分の力だけで成してみせる、そう断言したルークにジエルダは身体を震わせる。

この圧倒的な自信、そして実力。彼の言つ言葉は虚言でも妄言でもない、真実だとジエルダは確信していた。

ルークなら、己の力でスラム統一を果たすことができるだろう、と。

「それに、万が一のことがあればアレも困るだろうが」

「困る？」

「魔女は国に仕える生き物だ」

そこでジエルダはつとめた。

そう、魔女とはドローシャ王国のみに仕える生き物。もしスラムの不良に執着し、その力を使つてはいるなどと国に知られたらネネの立

場が危ない。

神から「えられた神聖な力が、人殺しなどの為に使えば何と言われるか。

奥歯を噛みしめて眉間に皺を深くするジェルダ。未だネネが傍にいることすら納得できないと言つのに、ルークはネネの将来を案じている。

「とにかく、魔術を使つのはダメだ」

ネネは小首を傾げながらも、特に魔術を使わなければならぬ状況でもないので承諾した。

ジェルダは大きく息を吐いて立ち上がる。

「ルージュラの娼館の近くを虱潰しに探せば見つかるだろつ。あの周辺で手下の家はそんなに多くない」

「・・・わかつた。お腹すいた」

「なんて緊張感のない・・・」

ネネのマイペースに怒りを通り越して呆れ返るジェルダ。テーブルの上にあるバスケットごとネネに投げ渡すと、彼女はそれを見事に

キャッチして一番上のパンに噛り付いた。

硬いけれどそれなりに美味しいと、ネネは小さな口であつという間に平らげる。

「大人しくしていろ、いいな？」

「・・・わかつた」

ネネを一人にすると口クな事になりそつにないと心配が募るが、ずっと一緒に居るわけにもいかない。

ジエルダは何度か後ろを振り返りながら、ルークを探すために部屋から出て行つたのだった。

キスした途端にゆでダコのようになつて逃げたネネはそれつきり帰らす・・・。

紛れもなく行方不明になつたネネに、ルークのみならずルージュラらも頭を抱える。

「つたく、手のかかる・・・」

「同感だよ。

ジエルダの旦那を探すだけでも大変だつてのに」

ネネがいないと静かで平和だが、ずっと纏わりついていたものが急に亡くなつて違和感を覚えるのも事実。一番大変な時に厄介事を次々と起こされ、ルージュラは参つっていた。

「まあ、心配しなくとも魔女なんだから1人でも問題ないだろ。そのうちひょっこり現れるさ、あの子なら。

敵に捕まるなんて面倒なことになつてないといいけどねえ」

「・・・」

ルークは無言で酒を煽る。

空になつた杯には横に居る女がすぐに継ぎ足し、再び並々と注がれる。

「それで、ジエルダの旦那が見つかつたらどうするつもりだい？」

「・・・こつも通りだ」

今まで通りにスラムの統一を目指し敵を斬る、それだけ。ルークは杯の酒に映る歪んだ自分の姿を見ながら続けた。

「手下が集まり次第ロドス組を襲撃する」

ルークが得意としている1対1の勝負。ノロゾイともその勝負で勝ったのだ。

例え大人数と戦ってもルークの力は遺憾なく發揮できるが、サシの勝負では純粹な実力勝負となるため、剣で右に出る者はいないルークの方が分がある。

できればロドスとの抗争も、リーダー同士の一騎打ちに持ち込みたかった。

しかしルージュラは心配そうに助言する。

「けどねえ、ノロゾイの残党もいるし、新興勢力も台頭してきてるし、今は勢力図の変化が激しいんだ。

情報不足のまま下手に動けば逆に窮地に追い込まれるよ?」

「情報に踊らされるよりはマシだ」

いかにもルークらしい考えだと苦笑するルージュラ。

決して彼は情報を疎かにしているわけではないが、情報によりも勘を頼っている。まるで野生の獣のごとく敵の出方や作戦を嗅ぎ分けるそれは、おそらく生まれつきの才能を持ったルークにしかできない芸当だった。

「じゃあ、あたしらは仕事に戻るから、何かあつたら娼館に来てお

くれ。

それから天井の修復、頼んだよ」

「ああ

だんだん陽が沈み始めた夕暮れ。

ルージュラは他の女たちを引きつれて静かにアジトを後にした。

次の日になると、昨日まで居なかつた手下たちがジエルダの潜伏先に現れた。この調子だとルークの居場所が分かるのも時間の問題だ。夏の日照りの中で必死に情報を集める手下達の一方、ネネはアジトの備蓄を喰い漁りながらのんびりと暮している。

はつきり言って邪魔であつたが、そんなことを本人に言えるツワモノはジエルダ以外いなかつた。

「働くがざる者食つべからず！」

ジエルダに果物を取り上げられたネネは恨めしそうに視線だけで訴えるが、彼は相手にせず取り上げた果物を仕舞いこむ。

「・・・食べてないとやつてられない・・・。

ただでさえルーク様に3日も会えてないのに・・・」

ルーク欠乏症に陥つたネネは食に走つたらしい。

大人の約3倍の量をペロリと平らげているネネ。その上彼女のペットの餌も必要とあつては、アジトの備蓄が無くなるのも早い。もちろん無くなつた食料を求めて走り回るのは手下達である。

ジエルダは震える拳を握つた。

「お前がさつさとアジトの場所を思い出せばすぐに会えるのだがな

「ジエルダ様、よろしいでしょうか」

「すぐに行く」

部屋へ入って来た手下に呼ばれて出て行つたジエルダ。
入れ替わりにひと仕事終えた別の手下たちがわらわらと帰つて来た。

「今回もハズレかあ」

「あとはミコーとボンドのところだけだな・・・。

今日中に見つかるだろ」

「ルーク様、無事だといいんだけど。
あ、嬢ちゃん・・・いたのか」

イスにぽつりと座つてゐるネネに気づいた彼らは疲れた様子で空いているイスに座る。

疲れているのか、腰を下ろすなりすぐに突つ伏した。

「・・・まだ見つからないの?」

「ああ、でも後2軒だけだ」

「きつとすぐに見つかる。

今他の奴らが向かつてゐるからな」

それを聞いて安心したネネ。

ルークにもうすぐ会えるとなると心が高揚してきたのか、足をプラプラさせて無表情ながらに頬を染め喜んでゐる様子。

「しかしそれにしても今日はあつちーな」

パタパタと手を仰ぎながら顔を歪める男の言つ通り、今日は久しぶりの快晴で気温が高い。夏がいよいよ始まつたことを知らせる湿り気の多い風も吹いている。

じつじりと焼けるような口差しと、噴き出でくる汗は毎年ながら不快だ。

ドローシャは気候が穏やかであるが、スラムは平地のため気候には若干恵まれていない。必然的に作物の育ちも悪く、総じてスラムは慢性的な食糧不足でもある。

「おい、お前ら武器をとれ

声が聞こえた扉の方へ向けば、そこにはジェルダの姿。彼の険しい顔つきから、一同は無防備に休めていた身体を強張らせた。

緊張が走るなか、ネネは小首を傾げる。

「・・・何があつたの？」

「ルーク様の居場所が特定できた・・・が、襲撃を受けている

ジェルダが居ない状況下でルーク達が襲撃を受けているらしい。すぐには援護に向かわねばと、一同は部屋中を縦横無尽に駆け回る。

「ルーク様は、・・・無事？」

「当然だ。

お前は邪魔だからここで大人しくしてろ

「・・・ついていく」

ネネは少し考えてから口を開く。
当然ジエルダはいい顔をしない。

「足手まといになるのがわからないのか？」

「・・・でも」

ネネは不満げに濁しながら俯いた。
戦力の欠片にもならないネネだがやつとルークに会えるチャンスを
無駄にしたくはない。

「これ以上あの御方の邪魔をするようならこの俺がお前を叩き切る。
わかつたなら大人しくしていろ」

凄むジエルダに押されてネネはしぶしぶ頷いた。
しかしやはり不満だったのか大きく膨らむネネの頬。無表情のまま
頬だけ膨らんでいるその姿は、まるで頬一杯に餌を詰め込んでいる
ハムスターの様。

「ジエルダ様、準備が整いました・・・けど・・・」

手下たちは何とも言えない表情でネネとジエルダを交互に見、控え
めに声をかける。

「すぐに行く」

「・・・」

颯爽とマントを翻して去つていぐジエルダと、その背中を恨めしげに見やるネネ。

男たちが出ていくとあれだけ騒がしかつた部屋も静かになり、ネネは一人、今頃ルークのもとへ向かつているだろうジエルダを思つてため息を吐いた。

「本当によかつたんですかねえ、嬢ちゃん置いてきて・・・」

加勢に向かいながらそんなことを漏らす手下。ジエルダは苦々しげに顔を歪めてその手下を睨んだ。

「当然だ。

そもそもあんな得体のしれない物体がルーク様の傍にいるだけでも忌々しき事態だというのに・・・これ以上邪魔されて堪るものか

考えてみれば出会いから今まで、ネネの所為で巻き込まれた事件は数知れず。被害者も相当数いる。

ジェルダにはネネの存在が百害あって一利なしとしか思えない。

実際に、今の所はその通りであった。

「でも、嬢ちゃん一途だし。

なんていうか・・・応援したくなるんですね」

「そうそう。あんな細つこい小さな体でいつもルーク様のために一生懸命でさ。

好きな男のためにこんな物騒な所に飛び込んでくるなんて、まだ幼いくせに肝つ玉座つてるよなあ」

「なんだかんだで憎めないですよね」

口々にネネのことを褒める男たちに、ジェルダの血管が音を立ててブチ切れた。

「うるせえ！――！

ルーク様に魔女など相応しくない！――論外だ！――

あまりの怒り様に動搖が走る。

何故ここまでネネを毛嫌いするのだろうか、と。

「で・・・でも、恋愛なんて本人にしかわからないもんだし・・・」

「そりですよ、趣味なんて多種多様・・・」

「貴様ら、どひちの味方なんだ！？ああ！？」

フォローが氣に入らなかつたジエルダに凄まれ萎縮する手下たち。氣まずい空氣が漂つ中で誰もが沈黙してこりつひこり、ルークの一行と合流を果たすことができた。

敵の数はそれほど多くない。今的人数ならば簡単に撤退に追い込むことができるだろ。

ルークの姿を見つけたジエルダはほつと肩を撫で下ろし、彼に近づく。

「ルーク様、ご無事で」

「あいつはひうした、一緒じゃないのか」

一言田にネネの話題が出てきて、ムツヒジエルダは眉間に皺を寄せた。

「置いてまつりました。戦闘の邪魔になつてはと思つて・・・」

「バカが。なんで連れてこねえんだ」

「・・・・つ！必要ないでしょ！あんな何も役に立たぬ魔女など！」

「そういう問題じゃねえ

何故ネネが皆に庇われるのか。何故自分が責められなければならぬのか。

ルークの右腕としてずっと彼を支え守ってきた自分よりも、突如現れた小娘を大切にするなど理解できない。

佳境に入る前にルークの味方が増え、劣勢になつたと悟つた敵はさつさと退散してしまつた。あつけなく逃げた敵を情けないと思いつつも手下たちは笑みを漏らす。

「これで嬢ちゃん迎えに行けますね」

「喜ぶだらうなあ。ずっとルーク様に会いたがつてたしな」

戦いが終わつたかと思えばまたネネの話題。ジエルダは痛いほどに唇を噛みしめ、血に染まつた刀身を睨んだ。

出会った2人は何も言葉を発しなかった。
ただネネの頭の上に置かれた大きな手は、優しく、温かいものだつた。

「……どこに行つてたんだ」

口火を切つたのはルーク。静まり返つた小さな部屋の中、ネネは無表情のまま俯いて返事をする。

「す」し・・・遠出を

「長かつたな」

「・・・はい・・・とても・・・長かつたです」

たつた数日が異様に長く感じられたのは、一緒に居るのが当たり前になつていて証拠。お互に忙しかつたにも関わらず、隣に居ない空虚さを感じていた。だからこそ再会できた、たつたそれだけのことで気持が高揚するのだろう。

ネネはそう思い、やわつく胸を押さえて目を細める。

ルークはネネを見下ろす形で、再び静かに口を開いた。
チラリとロウソクの火が揺れる。

「俺はスラム統一を果たす」

「……はい」

「意味のないことに思えるかもしけねえが、スラムの長い歴史の中で誰も果たせなかつた野望だ。だからこそ果たすことに価値がある」

勝つこと。それは生き抜くための本能。ネネはルークを見上げて小さく首を縦に振る。

「果たした後にどうなるかはわからねえ。国が動き出す可能性もある。

だから俺は世界で最も強大な国を敵に回す覚悟がある」

「私は……」

「それがお前にはできない」

魔女、という存在。神の子といわれる特殊な力を持った女。彼女たちはドローシャの王の命に逆らうことはできない。それは揃ではなく、魔女の本能としての絶対的なものだつた。

ルークがドローシャの敵となれば、すなわち、ネネの敵となる。

「スラム内のことであれば国が干渉してくる」とはないだろう。統一した後、俺はこの国をどうこうつする気はねえからな。だが、万一の時もある。

その時に立場を危うくするのはお前自身だ」

「わかつています……それでも構いません」

「火あぶりになつても知らねえぞ」

「それはとても興味があります」

「火あぶりに興味を示すな」

ネネは深く息を吐いてから、しつかりとした口調で話を続ける。

「わかつています・・・。でも構いませんよ。

今一緒に居られるならそれでいいんです。

離れなければならぬその時まで、傍に置いてください」

ゆっくりと琥珀色と赤色の視線が交わると、慌ててネネは顔を反らした。

ルークがクスリと笑うとそれが色っぽいやら恥ずかしいやらで、ネネは耳まで真っ赤になり顔を手の平で覆つ。

「なら、その照れ癖をなんとかするんだな」

「・・・はい」

「つたぐ、前はぐつたり服を脱いだり平然としてたじやねえか」

「・・・どうせ相手にされないだろ」と思つて全然期待してませんでした・・・」

「アホか」

「・・・すいません」

「早く直さねえと先に進めねえぞ」

「……はい」

ネネは指の隙間からチラリとルークの顔を覗き見たが、思ったよりも顔が近付いていて小さな悲鳴を上げる。

その様子が可笑しくてルークが吹き出し、ネネは收まりかけていた顔の熱が一気に戻ってしまったのだった。

ネネがルークと再会を果たしてからというもの、彼女はずつとルー

クの傍に張り付いて離れなかつた。まるで金魚のフンの如く、何処へいつてもルークに付いて回るネネの姿。

それを見守つている手下たちは、温かいまなざしを向けていた。ルークがネネを邪険にしないといふところが、なんとなく彼らの心をくすぐつたくなせる。

そらに大きな変化がもう一つ。

ルークに触られただけで真っ赤になるのだ。正確には、ルークから積極的な接触があつた時。

昨晚の膝の上に乗せられた時なんかは、顔から湯気が上りそうなどだった。

「――カワイイ――！」

昨晚の様子を思い出した一同は手をぶんぶん振つたり床を叩いたりして激しく悶える。

「つは――なんだこの言ひ表しようのない高揚感は――」

「この世にあんな可愛い生きものがあつていいのか?」

「あの頃の積極的な嬢ちゃんがウソのようだ・・・・」

「まさに形勢逆転だな！」

実は恥ずかしがり屋だったネネの話題を肴にすると酒が異様なペースで進む。それほどにルークのネネのやりとりは彼らにとって面白いことこの上なかつた。

さらにルークらの戦力が回復し始めたこともあって、皆の機嫌がよ

いのだ。

「だが、仲睦まじいシーンは端から見れば多少犯罪臭いがな」

「あの体格差は確かに卑猥だ」

ルークはスラムを生き抜くだけあつてかなり良い体格をしている。対照的にまだ身体の成長が止まる25歳に満たないらしいネネは、

その2人が寄り添う姿は、第三者に良からぬ想像をさせるものだつた。

「嬢ちゃんの身体が心配だなあ」

「うちの頭、デカいからな」

「絶対ドSだし」

「嬢ちゃんは健気だから献身的に尽くしてるんじゃないかな?」

ルーケ様のために我慢して毎晩毎晩・・・泣かせるねえ」

下品な会話にげへげへと厭らしい笑いは止まらず、だんだん会話がヒートアップしていく。

といろが。

「 · · · 猥談？」

神出鬼没なネネの心臓に悪い登場に驚きの声を上げる一同。情けない叫び声を上げた彼らは、心臓をバクバク言わせながら大きく息を吐いた。

「お、驚いた～」

「魔女ってそんなに突然現れるものなのか？」

「頼むから気配消したまま近づかないでくれ・・・。心臓に止まるかと思つたぞ」

口々に文句を言ひ手下たちに、ネネは小首を傾げる。

「驚いたら心臓が止まるの・・・？」

「まあ・・・、ショック死する奴も中にはいるだろ？よ」

「・・・なるほど」

「試したいなら他の所でやつてくれな？」

実験台にされるのは勘弁だとひきつった笑いをしながら頼む。ネネならば自分たちで試しかねない、と。ネネは無表情ながら少し不満そうに唇を歪め、一くくりと頷いた。

「ところで、ルーク様はどうした？」

「・・・武器商人と商談中」

「そりが、いよいよか・・・」

感慨深げに遠い目をして漏れるため息。

力を蓄えるために戦闘を禁止されていたが、やつとまともに暴れることができそうだ。溜まりに溜まっていた鬱憤を晴らそうと、皆の目に欲望の火が灯る。

ルークがスラムの頂点に立つために倒すべき巨大な敵はたつた1人。

「実力ならロドスよりも頭のほうがずっと上だ。

順当に2人が対峙するシチュエーションをえ出来上がりければ勝利は間違ひねえな」

「だが相手は黒鳥だ。 そう簡単にはいかねえよ」

「あつたまだけはいいらしいんだよなあ。

狡賢さだけで組を作り上げたような奴だからな。 戦闘は弱いくせによお」

「ルーク様なら大丈夫さ。 あの人は直感派だが頭も回る人だから」

「待ち遠しいな」

「なあ・・・皆はどうするよ、頭が統一したら」

ルークがスラムの頂点に立つた時のことを考える一同。 欲望に塗れた妄想に、だらしなくも口が半開きになつたりニヤ付いたりしている。

「威張り散らしながらスラムを歩き回つてやるぜ」

「そりゃあ、うまい酒たらふく飲んで女侍させて」

「女にモテるよつこなるかな」

「当たりめえだ。ルーク様なんか女まみれでウハウハ……あ
口髭を生やした男はネネの存在を思い出して慌てて口をつぐむ。隣
にいた男がバカヤロウと肘で彼を突いた。
無表情のためネネの感情は読み取れないが、一気に氣まずい空気が
漂う。」

「だ、大丈夫大丈夫。
ルーク様は魔女さん一筋だつて！」

「そうそつーあの人は女より喧嘩、つて感じだしなー！」

「きつと一途に違いねえ！」

「嬢ちゃんがいるんだ、浮氣なんかしないさー絶対え！」

彼らの精一杯のフォローに、ネネはゆっくりと口を開いた。

「……いい、別に。私が勝手に好きなだけ……」

その言葉で滝のような涙を流し感動する男たち。ネネは若干面倒く
さそうな顔をしている。

「なんて健気なんだ！？」

「こないい子だったなんて……！ゲテモノ好きじゃなければ俺

が嫁に貰つてやつたのに……」

「誰が誰の嫁、だと？」

聞き慣れた声が聞こえ、空気がピシッと音を立てた。ギギギギと音がしそうなほどぞんざいちなく首を回せば、声の主であり自分たちの主である人物の姿。

ルークは視線だけで人を殺しそうなほど恐ろしい眼光で睨んでいる。

「こいつを娶るつもりか？」

「い・・・いえ・・・〔冗談で・・・・・魔女様を嫁にだなんて・・・・・恐れ多い」

ちびりそつなほどガクガク震えながら必死に弁護する男は今にも倒れそうなほど。

「今後自分の発言には気をつけろんだな」

「へい・・・すみません、頭・・・・すみませ・・・・」

お咎めはなかつたものの、結局彼は恐怖のあまり泡を吹いて倒れた。

時は来た。そう呴いたのは誰だったか。

武器を手にし念入りにチョックをする手下たちは、目を煌々と光らせて笑みを浮かべた。久方の戦闘に胸が高鳴る。

戦力を高めた彼らは今からロードス組との戦闘へ向かう。決着がつけば、これが事実上ルークがスラムを統一するための最後の戦いとなる。

「お前は付いてくるんじゃないぞ」

ルークはネネに向かつて何度も念を押した。言い聞かせてはいるが、なんとなく黙つて付いて来るような気がしたからだ。

「……はい、大丈夫です」

「どうだか……」

ルークはため息交じりにそう呴く。

戦闘中に急に現れるネネの姿が容易に想像できてしまうから恐ろしい。前科があるからこそなおさら恐ろしい。

「何もせず、じつとして待つていろ。
必ず迎えに来る、いいな？」

「...せい」

ルークは深く頷くと腰に剣を差し、ジエルダの方を向いた。

「日が昇つた、出発するぞ。準備は」

「は、滞りなく。敵方のアジトの情報の確認も取れました。
・・・・いよいよ、頂点を取る時が来たのですね。貴方ならいつか・
・・とは思つていましたが」

当たり前だとルークは不敵に笑い、武器を手に指示を待つ手下たちへ言い放つ。

「てめえら！ 行くぞ！」

建物がミシミシと音を立てるほど歓声に押され、ルークは最後の戦いへ向かう一歩を踏み出す。

ネネはその脳中を見えなくなるまで見送り続けた。

「……せじりがいじ」

ネネは陽が一番高いところまで昇つても、ルークを見送った場所から動かなかつた。

心配はしていなかつた。不安でもなかつた。ただ離れているのが嫌で、一緒に居られないことが寂しい。

今朝までは活氣づいていたアジトも今は物音ひとつせず、ネネは俯いて目を閉じる。

今頃ルークは剣を振つてゐるだろう。その証拠に、今日のスラムはいつも増して殺伐としていた。遠くからかすかに聞こえる喧騒に、恐怖を感じた住民たちは家に閉じこもつてゐる。

「こんなところにいたのかい？」

色氣のあるアルトの声に振り向けば、そこには懐かしいルージュラの姿。相変わらずの派手な娼婦の恰好は、明るい日差しの中ではとても違和感があった。

「ルークはどこだい」

「……もういいとは……」

彼女は「そりかい」と眉をしかめて呟く。
深刻そうな表情で辺りを見回しながら、ネネの目の前まで近づいて見下ろした。

「噂じゃルークがロードスの首を取りに行つたって言つじゃないか。
これが叶えば間違いなくスラムはルークの天下になる。
どうだい？お前の目から見て勝機はあるかい？」

「……もういいとこ

「あたしもね、ルークが勝つと思つよ。
ただね、戦いつてのは一日一日で終わるもんじゃない。なのにあん
たはずーっとここで突つ立つてゐる氣かい？」

「……何も手に付かないから」

「氣持ちはわかるけど、その調子じゃルークが帰つて来る前にあん
たがミイラになっちゃてるよ。
戦いに勝つて戻つて来たつてのに一番にあんたの死体を見せられた
んじゃ、ルークも堪つたもんじゃないさ」

ネネは少し考え込んだ後「クリと頷く。ルージュラは紅で赤く塗り
つぶした口から大きなため息を吐いた。

「女一人をこんな薄汚いところに置いていくわけにもいかないし、

「うちの娼館で保護してやるから付いて来な」

「でも・・・ルーク様はここで待てって・・・」

「そりや魔女ちゃんが戦場まで付いて来たり行方不明にならないよう言つたのさ。問題ないよ」

強く勧められるも、ネネは首を縦に振ることができず黙りこむ。でもあることならここでルークの帰りを待つていたかった。

「あーもう、仕方ない子だね!」

痺れを切らしたルージュラは無理やりネネの細い手首を掴んで歩き始めた。ずんずんと引っ張られるネネはされるがままに足をもたつかせながらその場を動きだす。

掴まれてこる手首が痛い。

「あ・・・あの・・・」

「グズグズ言わないーさつさと歩くんだよー!」

有無を言わさず付いて行つた先は娼館ではなく、何故か住み慣れた師匠の家だった。ネネはここに連れてこられた意図が分からず、困惑してルージュラの顔を見上げる。

一方ルージュラはきまりが悪そうに顔をしかめて口を開いた。

「悪いね、でもこれもあたしの仕事なんだ。
悪く思わないでおくれ」

「遅かつたね……ネネ」

家中の中からは懐かしい老婆の声。ネネは肩を小さく震わせながら、意を決して建付けの悪い扉を開く。

そこには椅子にゆったりと腰かけた師匠の姿があった。
しばらく会つていなかつたからだらう、久々に見た師匠の顔には以前にも増して皺ができる。年老いてもうすぐ寿命を迎える証拠だ。

「探していたんだよ、ネネ」

ネネはゆっくりと師匠に歩み寄り、ルージュラは腕を組んで静かに扉に背凭れる。

「……なぜ、私を？」

「陛下から招集命令が下されたよ。」

もひりん
ネネも参加しなければならない

一瞬息を止めてから大きく吐き出すネネ。無表情だが、顔には“面倒くさい”と思いつきり描かれていた。
よりもよつてルークの帰りを待つていてるの時にしなくとも、と
ネネは心の中で独り口づかる。

「……どれくらい？すぐに帰つてこられる？」

「わからん……が、お前はもうスラムにま戻つてはならん」

「え……」

黄土色の瞳を大きく開いて師匠を見つめるネネ。言わされたことが上手く飲み込めず、ネネはもう一度問うた。

「でも……なんで……？」

「知らぬが仏 　　　　　　といつ諺があるだらう？ 知らないほうが幸せなこともあるんだよ。
とにかく、お前はわたしのヘソクリを返してから今すぐに王城へ向かいなさい」

「……やだ、いかない……やだ」

ネネは何度も首を横に振る。

ネネには約束があった。ルークの帰りを待つといつ約束が。

黙々と捏ね始めたネネに老婆は頭を抱え、困った様子で説得を続ける。

「そう言つとは思つておつたが……。
まったく手のかかる弟子だ」

「約束、してるから……いけない。絶対にイヤ……」

「しかし、陛下直々の命令なのだから断ることはできないんだよ。
何度も言い聞かせただろう？」

魔女は神の子、神の化身とも言われるドローシャ王に逆らつては不可能

「……」

ネネは軽く唇を噛んで黙り込んだ。普段使わない頭を必死に動かしても、招集から逃れる方法は見つからない。

老婆は大きなため息をつく。

「往生際が悪いね。これは魔女という生き物に生まれた運命。お前があの男に惚れた時にもちゃんとわたしは忠告したはずだ。やめておけ、と。

何の覚悟も無しにあの男と一緒に居たわけではなかろう。ただ、今その時が来ただけだよ。残念だろうが、ネネはもうスラムに戻つてくることはできん。あの男と会うことはもうないだろ?」

ネネはぶんぶんと首を横に振つた。

「わからない……なんで……」

老婆の言つことに多少の矛盾があつた。招集がかかっただけになぜ引き離されなければならぬのか。

もちろん約束を果たしたいネネは招集を受け入れることができない。しかし“もうルークに会えない”といつ言葉は、もつと受け入れることができない。

知らぬが仏、そのようなありきたりな諺では納得できず、もう一度老婆に訊ねた。

「なぜ……今招集がかかつたの……なぜスラムに戻れないの……何のために陛下が私を呼んでるの……」

困り果てた老婆は眉を八の字にしてルージュラを見合わせる。2人の無言のアイコンタクトで、今まで静かに見守つていたルージ

ユラが口を開いた。

「それはとーつても単純な話さ。とーつても、ね。
ま、いつかは知らなきゃならないことなんだけじゃ、魔女ちゃんには相当ショックだと思つよ?
それでも全てを聞きたいのかい?」

ネネは無言で口クリと頷く。

ルージュラは小さく頷いてから話し始めた。

「つまりはねルークが『ドローシャの敵』、だということなんだよ。
そして今の私たちにとつて、最も危惧すべき存在だからだよ」

ネネはわけがわからず小首を傾げる。

ルークはまだスラムの統一を果たしていない。果たしたところでは、
それは無法地帯のスラム内だから許される行為のはず。わざわざ国王が動く理由にはならないし、ドローシャの敵になる理由にもならない。

ルージュラは続けて口を開く。

「だつてあの男は

「

「終わったか……」

数回の昼と夜が過ぎ、決着はついた。

ルークは顔に付いた返り血を無造作に手の甲で拭うと、剣を鞘に納めて後ろを振り返る。

「そつちは片付いたのか、ジェルダ」

「……はい。とうとう……やつたのですね」

ジェルダは夢見心地にそう言つて、ルークの足元にある首のない遺体を見遣つた。彼は先ほどまでルークとともにスラムのトップに居た存在。しかし今は、ただの動かない死体にすぎない。

そしてルークは頂点まで上り詰めた。長い長いドローシャのスラムの歴史の中で、誰も成し得なかつたことをやりとげた。

間違いなく歴史的な瞬間であった。

「たつた30年か……短すぎるな」

1万年という寿命の中でルークがスラムに居たのはたつたの30年程。それだけで統一を果たせるならば意外と簡単なことだったのかもしれない。ルークは興奮よりもため息が出る思いだ。しかしジェルダは首を横に振つて大声を上げる。

「違います！それはルーク様であつたからこそ！貴方だからこそ30年で統一できたのです！

「これは・・・運命に他なりません！貴方の・・・」

「そんなもんに興味はねえよ。さつさと帰るぞ

「お待ちくださいー！」

ジェルダは慌てて行き先に立ちはだかり、ルークの額にくつきりと青筋が浮かび上がる。

「てめえ、何の真似だ

「申し訳ございません、しかしルーク様をあの魔女のもとへ返すわけにはいかないのです」

「切り殺されてしまふのか？」

ルークはスラリと長い刀身の剣を抜き、ジェルダに切先を向けた。ジェルダは震えながらも意志の強い目でルークを見据え、しつかりとした口調で続ける。

「例え殺されたとしても、私は納得いくまでここを退くわけには参りません。

貴方に、『自分の運命を受け入れていただくまでは。そのためには私は、貴方のそばに仕え、見守り、守ってきた』

「どういふ意味だ

ルークは不快そうに顔をしかめ、ジェルダを睨む。

「どうかご理解いただきたい。貴方が・・・ルーカス様が、ドローシャの敵である、ということを。中心の国を倒すことができるのには貴方しかいません。

ベルガラ王家の生き残りである、貴方しか」

「・・・・敵国の?」

ネネはルージュラの言葉を自分の口で繰り返す。
何故ルークと会うことが許されないのか、その理由が「ルークが敵
国王家の生き残りである」ということ。

ルージュラは重い面持ちで深く頷いた。

「そうだよ。30年前に起ひたノルティ戦争で滅ぼした敵国王家の生き残りだつたのさ。寝耳に水つてヤツだよ。まさかこんな近くに敵がいるなんてさ・・・参つたね」

「わかつただひ、ネネ。お前は最初から叶わない恋をしてたんだよ。

今は難しいと思ひが・・・早く諦めることだ。受け入れるんだよ、お前の運命を」

「運命・・・」

ネネはポツリと零すよひに歎く。

「そう、抗い難いものなのだよ。

ノルティ戦争は・・・そりやもつ大変な戦争だつたよ。ドローシャも手を焼いてね・・・結局は王妃の手によつて終わらせたが」

老婆は思い出しながら話し、ルージュラも肩を竦めて続けた。

「私はスラムの中にいたからあまり詳しいことは知らないけどさ。敵国の王家は滅ぼしたつて聞いてたんだ。だからまさか生き残りがいたなんて思わなかつたのさ」

「生き・・・残り・・・」

「そう。しぶといね、ベルガラ王家も」

「ベル・・・・ガラ・・・・・」

ネネは半ば呆然として目をパチクリさせた後、鼻で小さく息をして口角を上げた。

「あの人ガ・・・・ベルガラ王家の生き残り・・・ふふつ」

嗤つた、あのネネが。

老婆とルージュラは身震いを起こして自分の腕を抱きしめる。何があつても感情ひとつ見せず無表情を貫き通していたあのネネが、初めて嗤つた。

それは喜びからか悲しみからかは分からぬものだったが、彼女は確かに、《嗤つて》いた。

ルークは眉間に皺を寄せてジェルダを睨み続けていた。面倒極まりないジェルダの告白は信じたくもなかつたが、彼はどうやら本氣で話しているようだつた。

「何を根拠に言つてゐる。俺がベルガラ王家の生き残りだと？
バカじやねえのか」

「嘘ではありません。

ドローシャから逃れるために貴方を王城からスラムまでお連れしたのは私です。ルーカス様はまだ幼くて・・・記憶になかつたでしょ
うが・・・。

陛下とは遠縁にあたりますが、間違ひなく王家の「」出自なのです

ジェルダは腰を沈め、片膝をついて頭を垂れる。その姿はまさに主への忠誠を尽くす騎士であつた。

「ずっとこの時を待つておりました。貴方が成長しベルガラの王として相応しい人物になる時を。

今ベルガラはこの国によつて支配され、管理下に置かれています。ルーカス様はこれからベルガラにお戻りになり、ドローシャを倒すべく御尽力を

「

「アホくせえ」

「ルーカス様！」

ジェルダは咎めるよつて舌を呼ぶが、ルークは半ば呆れたよつな口調で話す。

「ただ生まれたってだけだらうが。そんな国に愛着も思い入れもねえよ。

俺はスラムの人間だ、根っからなのな。今までも、これからも

「叶いません・・・それは絶対に」。

ベルガラ王家の血を引く以上、ドローシャは必ずや貴方の命を取りに来るでしょ。

貴方は生まれながらにして中心の国を敵に回す方なのです。もはや運命、どうして逃れられましょ」

ジェルダは力説する。そして彼の言つ通り、他に道はないよつて諂われた。

ルークは不機嫌そうに舌打ちをしてジェルダに向けていた剣を納める。

「・・・一度アジトに戻るぞ」

「なりません」

「迎えに来ると約束したんだが、俺に約束を違えさせん気か」

「しかし一度戻つてしまえば、あの魔女は無理にでも貴方について来ようとするでしょ。

まさか魔女にこの国を裏切らせるおつもりですか。それはあまりにも酷というものです」

「だが帰らねえと、ずっと待っているだらうが

自分を交わした約束を今もネネは守っているはずだ。ここ数日間、戦いへ向かつたルークの帰りをずっと独りで待つて、そして今も待つている。

もしここままルークが帰らなければ、一途なネネの性格上、ずっと待ち続けるだろ。たとえ何十年だらうが、何百年だらうが。

ジェルダは声のトーンを落として静かに呟つ。

「・・・残酷ですがこれが現実。

田の前で引き離されるよりも、何も知らず待っていたほうがあの魔女にとつて幾分かマシなのでは？」

一理ある言葉に、ルークは再び舌打ちをして顔をそらした。

「今すぐに行かなきゃならねえのかよ」

「・・・一刻も早く」

ジェルダは懐に差していた自らの剣を取り、それをルークに差し出す。

「これはベルガラ王家よりお預かりしていたものです」

手に持つてみればなんの変哲もない剣。金持ちの持つているような派手な飾りのついた剣ではないが、手に持つたときに奇妙な一体感を感じた。

「ベルガラの国宝で、『それこます、絶対に無くす』とのないよ。

それから、これも・・・」

今度はシャツの下に巻きつけたベルトから、挟んでいた本を取り出してルークに渡す。ボロボロな上に字が全く読めない、怪しげな本だ。

「それも国宝品でござりますので

「これが?」

疑いの眼差しで眺めるルークとは対照的に、自信満々に頷くジェルダ。

「はい。

中心の国を倒すためには、絶対に必要不可欠なものでござりますよ

運命が動き始める。

それぞれ、別の方向へと。

ガタゴトと揺れる馬車の中、ネネはぼーっと小窓から景色を眺めていた。スラムにはない山や綺麗な川の水、活気のある商店街にどこも壊れていらない民家。雰囲気はもちろん、空気から全く違う。城下町に入るとさりに活気と笑顔に溢れ、この国が世界で最も豊かであると実感できるような場所だった。

「着きましたよ」

ふと視線を上に向ければ大きな城。いつの間にか到着していたらしい。ネネはお金を渡すと大きな荷物を持って馬車を降りた。

冷たい秋風が水色の髪を靡かせる。

「お待ちしておつました、ネネ様」

いきなりネネの周りを取り囲んだのは、かつちうとした分厚い布地の制服を纏つた兵士たちだつた。紫色の制服を見るに、おなじく王妃軍だらうと推測できる。

「……どこへ行けば？」

「明日謁見の間で陛下と王妃様にお会いしていただきます。それまでは用意した部屋で待機してください」

案内します、と一番偉そうな兵士に先導されネネは歩き始めた。ところが、後ろからボソボソとした話し声がネネの耳まで届く。

「あれが荒廃の魔女の弟子らしい」

「噂のルーカス・ブラッドの恋人って魔女か。

思つてたのとだいぶ雰囲気違うな、まだ成人してないみたいだ

「だが顔は確かに可愛いな。俺タイプ」

「色気が足りねえよ。胸もあんまりないみたいだしな、はははっ」

本人たちはネネにわざと聞こえるように話しているのか、一言一句漏らさずばつちりと聞き取れている。気まずい空気が漂い、先導している兵士は、ゴホンッとわざとらしい咳を漏らした。
しかし噂している彼らは平氣で話を続ける。

「でも困るよなあ、陛下も。

まさか魔女が敵に通じるとは、なあ

「処分するわけにもいかねえさ、一応は神の子なんだから」

「おーおーおー、そーらくんにしどかないとお前らが処分されるぞ

止めに入ったのはネネでも先導の兵士でもなく、新たに現れた人物だった。場にそぐわない庶民的な服を着た、茶髪青目の綺麗な顔立ちをした男性である。

噂をしていた男たちは彼に気付くと、蛙が潰れたような声を上げて頭を垂れた。容姿や身のこなしから相当身分が高い人物だと思われるが、彼はネネを見て一ノリと笑うと気さくに話しかけてくる。

「悪いな、不快な思いをさせてしまつて。本当はそんなに悪い奴らじゃないんだ」

「・・・べつに」

無感情に返すネネに、男性は田を丸くしてから顔を綻ばせて満面の笑みを作る。

「おうおう、噂通りの魔女さんだな！
俺はランス。適当に呼んでくれ」

「じゃあ・・・」

ブフオッと勢いよく噴き出したのは先導の兵士である。彼はわなわなと口を震わせながら慌てて口を挟む。

「ネネ様！そそそのお方の身分は仮にも殿下でござりますー。
そのような呼び方は・・・！」

「ランラン・・・別にいいナビ・・・ランラン・・・」

どうやらランスと名乗った男は王子殿下だったらしい。ランスは俯いたままブツブツとネネのつけた愛称を繰り返す。

それにもしても彼の恰好はとてもドローシャの王子とは思えぬほど高級のこの字もなかつた。田舎にいても普通に庶民で通りそうなナリだ。変わり者の放蕩王子と言われるのも納得だと、ネネはランスの顔をまじまじと眺める。

「ランラン・・・・、うーん、可愛いけど女みたいだな・・・

「・・・・、そ、う?」

「よし、じゃあ俺はランランで!

お前の名前は・・・、ネネだつけ?」

「クリと無表情のまま頷くネネ。全く感情を見せないネネを不思議に思ったのか、ランスは小首をかしげながら顔を近づけた。

「いや、現物を見るとまた違うもんだな。すげー、違和感。生きものじゃないみたいだ」

先ほど兵士たちの悪口を注意した彼だが、自分の発言も大概失礼である。しかしそれが周りの素直な感想だつた。
実際に目の前にしてみると、いくら噂を聞いていても違和感を感じる。

まるで人形のようだ、と。

「ああ、明日父さんたちに会うんだろ?
すげー仏頂面でちょっと雰囲気怖いけど。心配しなくても大丈夫、
俺も一緒に居るから」

大船に乗つたつもりでいろよ!と胸を叩く頬もしいランス。
なんだかいちいち元気な人だなあ、そういうえばお腹すいた、とネネ
は失礼なことに全く別のことを考えていた。

「魔女の収集かけたがネネが最後だぞ!もう皆帰っちゃった、残念
だつたなあ」

「ううう……」飯おいしいのかな……

「王城は広いからな、迷子になるなよーちなみに俺は今でも迷うー」

「…………だんご…………たべたい」

テンションの高いランスとは対照的にぼーっとしているネネの囁み

合わない会話、それを戦々恐々と見守っている兵士たち。

先導の兵士はその奇妙な空間に耐えられずランスに一礼すると、ネネの首の根っこを掴んで無理やりその場を辞したのだった。

砂を巻き上げる強い風が吹く中、ルークとジェルダはスラムを出た。外から見るスラムは外界から完全に遮断されるが如く、高い壁で囲

われている。

中に居たころはスラムがとても広く感じたが、外から見てみれば所詮国の一 角に過ぎないことがよくわかる。

「名残惜しいのですか？」

スラムを見つめるルークに、ジェルダは窺つように質問する。ルークはいいや、と否定した。

「そうじゃねえよ」

自分でも驚くほどに、幼少期から育つたスラムだが愛着はない。名残惜しいのはスラムではなく、何も知らせず置いてきたネネだった。今も独りで自分の帰りを待つて いるのだろうか、と。

「・・・行くぞ」

スラムに背を向けて歩き出すルークにジェルダが続く。

彼らが今から向かう場所は、生まれ故郷であるベルガラ王国。ドローシャの西側に位置する、かつては王権がとても強力な国だつた。今は敗戦国としてドローシャの支配下となり、すべての王族は肅清されたとしている。 ルークを除いては。

ベルガラへ行き、そしてルークはドローシャに挑むことになる。ベルガラの権威を取り戻すために、王国を復活させるために。

「血筋をなにより重んじるベルガラでは、頂点に立つ者は必ずベルガラ王家の血を持つ者でなければなりません。 でなければ、民はついてきませんので」

「めんべくせえ国だな」

ジェルダは眉をしかめて息を詰める。

「・・・やつおつしゃらす。

ベルガラはドローシャに次ぐ歴史を持つております。その王家の血筋は創立から一度も耐えておらず、世界最古の王朝とも言われております。

国の誇りなのですよ、ベルガラ王家は

「やつぱつめんぢうだ。・・・・・勝算はあんのかよ」

国を取り戻すためにはドローシャといつ世界で最も強力な国を退けなければならぬ。民の力を借りてもドローシャとベルガラでは大人と子供、普通に考えれば勝機があるとは思えなかつた。といひが、ジェルダには勝てる自信があつた。彼は声を低くして深く頷く。

「貴方にお渡しした本、それはベルガラ王家に古くから伝わる古文書です。詳しくは存じ上げませんが、どつやうり“人なりざる者と契約を結ぶことができる”のだとか・・・。

それを利用すればドローシャの軍をはるかに凌ぐ力を手に入れることも不可能ではない、と」

「なら戦争が起つた時点で使えばよかつたじやねえか」

ジェルダの言葉が本当なら、古文書を使えば戦争に簡単に勝つことができたはずだ。しかしへルガラは戦争に負け、こうしてルークの手元にある。

「わかりません・・・。

しかしベルガラの陛下はかなり変わった方だったそうで、オーティスとの戦争にあまり乗り気ではなかつたようなのです。

その古文書を使えるのはベルガラ王家の血を持つ者のみ。戦争を推し進めた臣下に扱つことはできなかつたのでしょうか？」

「どうやって使うんだ？」

ルークは疑い深い眼差しで古びた本を眺める。見たこともない文字はおそらく解読することも難しいだろう。契約を結ぶにしても契約の内容すらわからぬ。そもそも契約する相手が何なのかすらわからぬのだ。

ジエルダは淡々と答えた。

「私がそれを預かつた方からは『相應しき場所にて』と言つていました」

つまり、特定の場所でしか使えないといつてだらうか。どちらにしてもわかつていないうことの方が断然多く、しばらくはヒントを頼りに探すしかなさそうだった。

ルークは気が乗らず、舌打ちをして本を乱暴に仕舞い込む。

「こんなボロに振り回されるなんぞアメンだ」

「ルーク様、そうおっしゃりす・・・」

「つたぐ、めんどくせえ」

ルークは一度だけスラムを振り返り、再び背を向けて歩き始めた。

ネネに与えられた部屋は、今までの暮らしからは想像できないほど豪華なものだつた。食事も入浴も着替えも贅沢を以へしており、まるで金持ちのペットにでもなつた氣分だ。

綺麗に磨かれた窓ガラス越しに見える景色は、埃に曇ることなくあたりのままの美しさを映している。庭に積もつた落ち葉も人の足に踏みつけられることなく、赤々とした色を保つたまま景観に華を添えていた。

「だーいじょうぶだ！俺に任せてくれ！」

隣で頼もしい発言をしているのはランス。

謁見の間へ向かう途中でだだつ広い廊下を歩きながら、ネネはため息と共に肩を落とす。今からドローシャ王とH妃に会わねばならぬが、彼女はあまり気乗りしなかつた。

噂によると完璧とも揶揄されている現王レオナード陛下は怒らせる怖い、と耳にしたことがある。王妃エルヴィーラに限つてはかつて彼女を怒らせたベルガラは王城ごと吹き飛ばされたらしいのだ。

一応師匠に作法や礼儀は一通り学んだものの、きちんと実践できるか怪しい。そもそもネネにはルークがある。何を言われるかわからない。

そこでネネの心中を察しているランスが朝からつきつきりでネネを

励まそうとしているのだった。

「確かに母さんは怖い！父さんはもつと怖い！だが話がわからない人たちじゃない！」

「あいつとネネのことも気に入ると思つんだ！」

「あ・・・洗濯物・・・まわしたつけ・・・」

「そもそも恋愛なんて自由なものなんだ！人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死ねつて言つし！」

「まあ・・・だいじょうぶかな・・・」

「そう！問題ない！大丈夫だ！」

「ちょっと雰囲気ただ事じゃないけど慣れれば大したことはない！」

「・・・帰つて確かめたら・・・いつか・・・」

「やつぱポジティブつていいよな！」

「・・・虫、全然いないんだけど・・・」

相変わらず話が噛みあつていない2人。

兵士たちはハラハラしながら後ろで見守つていたが、ランスの中では何故か会話は成立しているらしい。今のところ特に問題はなさそうだった。

ランスが大きく重そうな扉の前で足を止め、ネネの方を向く。ここが外部の者が王族との謁見を許される場所、謁見の間。本来ならば王子であるランスもここで会うはずなのだが、本人がコレなので言

つても仕方ない。

「……だ、開けていいか？」

訊ねたくせにネネの返事を聞く前にちやつちやと扉を開けるランス。一瞬部屋の明るさに目が眩んだが、玉座に座っているランスによく似た男性がドローシャ王、隣に居る黒髪黒目女性が王妃で間違いないとすぐに断言できた。なぜなら彼らの美貌と纏っている空気そのものが普通の人間とは少し違っていたからだ。

目が合つた瞬間にピリッと肌が焼けるような衝撃が走りネネは後退つたが、ランスが背中に手を添えてくれたお陰ですぐに踏み留まつた。

ランスは頬を膨らませて2人を睨みつつ文句を言つ。

「2人とも、そんなに睨むなよ。ネネが怖がつてんじゃん

「なんだ、ランスもいたのか」

「昨日帰つて来たばかりなんだ」

最初に口を開いたのは王妃の方だった。

最強の魔女と名高いドローシャの至宝。どんな花や宝石よりも美しいと言われている、この世界で最も美しく強い女性。まるでこの世界にあるすべての美しい物が彼女のために存在するかのように、身上に纏っているドレスも、豪華な城も、彼女の引き立て役に過ぎない。しかし見た目の衝撃とは裏腹に、その言葉も言葉遣いもとても気さくなものだった。

エルヴィーラ王妃はネネを見てから口角を上げる。

「遅かつたな。

急に呼び出したあたしらも悪かつたけど

「……遅すぎだ。他の魔女たちはもつ用を済ませて帰った

王のほうは……ちよつと怖い。顔立ちはランスによく似ているが、性格はどいつもこなスと真逆らしい。

オブラーートに包まずズバツと言つたレオナード王に、ランスは笑いながら頭を掻いた。

「あはは、まあいいじゃん」ひやつて来てくれたんだしさ。

ほら、ネネ、挨拶」

まるで保護者のよつてランスに促され、ネネはおずおずと顔を上げて口を開く。

「……ネネ……です」

「あんたが荒廃の魔女の弟子だな、話は聞いてるよ。ルーカス・ブラッヂのことも……大変だつたな」

「……まあまあ」

「スラムの外はどうだ?」この城もテカくて驚いただろ

「……べつに……」

掴みどころのないネネに王と王妃は顔を見合わせる。噂には聞いて

いたが実際に会つてみるとやはり違和感が拭えない。

今度はレオナード王の方が口を開いた。

「収集をかけたのは例の件が全てだ。ベルガラの王家に生き残りがいたことに対し、ドローシャの総力をかけて探し出すため。手紙でのやりとりは漏洩の危険があるため、直接集まつてもらうことになった。戦争の記憶も新しく周辺諸国に混乱を招きやすいため一切公にしない」

ランスと似ているはずなのに似ていない。レオナード王は王妃よりもさらに人間っぽさの欠片もない容姿だつた。完璧すぎるのだ。吸い込まれるように視線が向かう王妃とは対照的に、レオナード王にはあまり視線を向けたくない。

ネネは目を細めて遠慮がちに口を開くと、小ぶりな唇から小さく覇気のない声が漏れる。

「・・・何をすれば・・・？」

「事が収まるまでお前にはこの城で過ごしてもらひ」

レオナード王の声が広い謁見の間で重々しく響く。

ネネは2人から視線を外し、無言のまま俯いた。すぐに玉座から降りたエルヴィーラ王妃は、ネネの肩を持ち、視線を合わせるように屈んで申し訳なさそうに言う。近くで見ればまた凄い迫力。

「悪かつたな、大変な思いさせて」

「・・・いえ」

「辛いよなあそりや。まさか恋人がこんなことになるなんて思つて

なかつただろううし。

そつとしておいてやりたかつたんだけど、スラムを牛耳つてゐるような実力ある奴を野放しにするわけにもいかなくてさ・・・にやつ！」

「や？」

一斉に見守つていた王やランス、兵士たちが頭の上にクエスチョンマークを乗せたところで、王妃は今度は大きな叫び声を上げた。

「ぎゅあああああーーなんか動いたーー動いたーー！」

「ヴィーラーー？」

慌てて駆け寄るみんな。ネネの肩を掴んでいた手をワナワナ震わせる王妃の様子に、攻撃を受けたのかと勘違いした兵士たちは剣を構えてネネを取り囮む。

「ストップーお前らやめろーーー！」

ここでもまず庇つてくれたのはランスだ。ネネの前に立ち、すぐに兵士たちに制止をかける。

「なんか動いたんだーー肩の所ーーー！」

必死のエルヴィーラ王妃の訴えに、ランスは首を傾げながら肩に手を置いた。すると確かに、何かが動いた。何とも言えない堅い感触が一瞬盛り上がったのだ。

おそるおそるもう一度触つてみると、ネネが「・・・ああ」と納得した様子で首元から服の中へ手を突っ込み、いつもの要領で取り出

す。

「・・・」
「」

「ああ、 それそれ・・・って蛇ーー?」

素つ頬狂な声を上げるヒルヴィーラ王妃。一方顔の田前に蛇を突き出されたランスは笑顔のまま固まつている。

「・・・ペシーテー」

「ペシーテは服の中に仕舞つものじやありませんーー。」

王妃は全力で訴えた。

レオナード王は頭痛に耐えているかのようこ面間にじわを寄せ頭を抱える。

「じやあ・・・非常食?」

「ビーチもダメだつてーつてか食えるかつー」

結局ネネのペシーテは危険物とされ、兵士にネネ」と譴見の間から摘み出されたのだった。

「というわけで！」

「・・・何が？」

「とにかくでー！」

「…」とヴィラはごり押しで
ネネの部屋でエルヴィーラ王妃
話を進める。結局謁見の間ではろくに話もできなかつたので、場所
を変えて話すことになつた。高い身分でありながら自分からネネの
私室にまでやつて来る辺り、本当に庶民派の変わつた王妃様らしい。
赤毛と銀髪の2人の兵士が見守る中、ヴィラはネネの目の前に座つ
て腕を組む。

「ネネには今日から」)」で暮らしてもいい。それからちゃんと魔術も勉強するんだ、いいな?」「

卷之三

魔女としてネネが城に呼び出された理由は、ここで暮らすことと修行に励むことの2つ。

不服だから、たまにねはそれをどうぞから目線を外すと、どうかさずヴィラがネネの両頬を掴んで自分の方を向かせた。

顔が近い。

「いいな？」

ヴィイラに凄まれ、仕方なくネネは返事を返した。

「……はい」

「よし、何かやつてみるよ

「……何を？」

魔術、とヴィイラは端的に話す。つまり魔術を自分の田の前で披露しろ、と。

ネネは少し悩んだ挙句、蛇の鱗と獅子のヒゲ、イノシシの田玉など鍋に放り込む。材料が溶けてふとネネが顔を上げると、ヴィイラと2人の兵士はいつの間にか壁に張り付いていた。まるで壁紙と一緒に化しているかのようにべつたりと。

何かの新しい遊びだらうかと、ネネは無言で首を傾げる。

「……？」

「？ じゃない！ 気づけ！ 自分のしていることに気づけ！！

自分の手の中にあるものを見てみろ！！！
つて違う違う……」 うちに近づけるなああああああ

「……」

ネネは潰れたカエルの死体を握ったままやはり小首を傾げる。
ヴィイラと2人の兵士は青ざめた顔で怖いもの見たさに鍋の中を覗き込んだ。ドロッとした田玉がこちらを向いた瞬間、言い様のない悪

寒が背筋を走つて首を横に振つた。赤毛の兵士に至つてはよほど堪えたのか、息も絶え絶えと言つた様子で今にも失神してしまいそうだ。

「それはなんなんだ！」

「・・・性欲減退薬」

「マジでか・・・！」

一瞬、ヴィラは瞳を輝かせたが、鍋の中身を見てすぐに思い直す。

「 だ・・・だめだ、ちょっとでも欲しいと思つた自分が馬鹿だつた！！」

「欲しいと思つたんですか、ヴィラ様！？」

「やめてくれ！・・・いくら超人のレオナードでも材料を知つたらひっくり返つちまう！・・・」

兵士2人の話を聞くと、どうやらヴィラは彼女の夫であるレオナードに飲ませる気だつたらしい。もし彼女が思い直さなければ、あわやレオナードはゲテモノを口にしなければならないところだつた。危機一髪。

ヴィラは気を取り直し、決死の思いで壁から一步だけ前に進んだ。自分を奮い立たせているのかピンと背筋を張り、仁王立ちで自分よりも背の低いネネを見下ろす。

「そんなもの飲めば性欲どころか寿命も削れるだろが！・・・魔術つて

言わねえ！！」

「…………えー」

「えー、じゃありません！？」

つてか本当にこんなやり方を荒廃の魔女から習つたのか！？」

「…………」

「やつぱり違うんだな！…違うんだな！？」

大声を出して興奮するヴィラはまた一歩近づいたが、鍋の中身が見えてまた一歩後ずさる。

「ど、とにかくそれは止めだ！他に何かできないのか？水を出したり、火を炊いたり……。

占いとかでもいいんだぞ？」

ネネはカエルの死体を握りしめたまま上を向いて考え込む。ヴィラと2人の兵士たちは「クリと睡を飲みながらネネが思いつくのをまた。

ところが、数分かけた後に出でてきた答えは全くの検討ハズレ。

「…………ない」

「はあ！？何年も弟子入りしてて何もできないのか！？」

それでもお前魔女 さやあああああ「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい！」

馬鹿にされて気に障つたらしいネネはカエルの死体をヴィラの方に

向ける。ヴィラはまた壁に張り付いて何度も謝り倒した。ネネは仕方ねえな、といった表情でカエルを向けるのは止めてあげた。

ホツツと安堵の息を吐く3人。

「！」の子・・・ランスよりも手のかかる・・・

「つていうか次元が違いますよ、魔女さん」

「性質が悪すぎます」

兵士2人の言葉に、ヴィラはまだ彼らを紹介していなかつたことを思い出し、改めて挨拶をし直すところから始めよう、そして今までの魔術と言えないゲテモノ魔術を見なかつたことにじょうど、ヴィラはひきつった笑顔を作つて赤毛の兵士のほうを指差す。

「紹介が遅れて悪かつたな、ネネ。

この赤毛はレオナードの護衛騎士でアルフレッド

「どうも」

「で、こっちがあたしの護衛騎士、シルヴィオだ」

今度は銀髪のほうを指さすと、彼はペーりと頭を下げた。中世的な顔立ちが可愛らしい男性だ。

「で、あたしがエルヴィーラ・・・ヴィラって呼んでくれ。一応王妃・・・うん、王妃なんだけど・・・うん、よろしく」

歯切れの悪い自己紹介で締めくくり、さっそく本題（実質2回目）に入る。

「突然魔女たちに収集をかけたのはいくつか理由があつてね。まずルーカス・ブラッドがベルガラ王家の生き残りだつて少し前からわかつてたんだけど、全スラム支配が目前に迫つて監査から連絡が入つて……」りやヤバイつてなつたわけ。

知つてゐると思うけど、スラムの支配なんて誰にも無理だつて思つてた。だからルーカス・ブラッドが成し遂げればスラムの外でも彼は有名人になる。さらにベルガラ王家の生き残りが居たつて市民に広まれば、大混乱

名を上げずひつそりと生きていれば問題視することはなかつた。しかし有名になつてしまえば野放しにしているドローシャは非難されるだろ？

世界の中心であるこの国は、一矢の轟りも許されないので。

「だから魔女会議を開いて検討して……、それから彼の処遇をどうするか決めよつと思つた」

「……どうなつたの」

「とりあえず保留、といふ名の搜索。

ルーカス・ブラッドがベルガラに行つたつて報告が入つたから……

・

その先はネネの前で言つてはできなかつた。ヴィラは声のトーンを変えて話を変える。

「とにかく、ネネには事が収まるまでここに住んでもいいことに決まつたんだ。悪いけど。

ついでに荒廃の魔女から頼まれたんだよ、お前にあまり魔術を教えてあげられなかつたから、変わりに教育してほしいつて」

「……めんどう」

「ボソッて言つても聞こえたからな！」

ネネはあまり向上心豊かな方ではないらしい。最も、修行というのもネネの動向を探るための一種の建前に過ぎないだろうが。

ヴィラは肩を揺らして大きく息を吐き、ネネの顔を遠くから覗き込んだ。

「こしても本当に全く笑わないんだな。我慢してるのか？それとも単に面白くないだけ？」

「……」

ネネは無視して鍋に材料を放り込むと、一氣にもくもくと煙が立ち、部屋中が煙だらけに。だんだん前が見えなくなり煙たくなつてきた3人は、手で払いながらゴホゴホと咳き込む。

「こら！それをやめなさい！

とにかく、窓を開けてくれ……！」

窓はどうだとうつひついていふと、急に田の前に現れるネネの姿。ヴィラはビクッと身体を震わせてから、ネネの差し出した小瓶を見つめた。

「・・・なんだ？」

「・・・・性欲減退剤。ヴィラ様のために作ったの・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

ネネはまだ無言のまま小瓶を差し出している。

ヴィラはこれを受け取るべきか受け取らないべきか考え込んだ。とても魅力的だが引っかかるつてはいるのももちろんその材料。蛇に獅子にイノシシに蛙。一般的な許容範囲内はどうに超えている。

「・・・ルーク様は普通に飲んでたけど・・・」

「マジ!? 効果は!?!?」

ビシイツーと無表情のまま勢いよく親指を立てるネネ。その効果に期待して手を伸ばすヴィラ。

しかし、それはヴィラの騎士である銀髪の男、シルヴィオがネネの手を払い退けたことで終わりを告げた。

白くて小さな手から離れた小瓶がカラカラと床を転がる。

「ヴィラ様を唆さないでください!」

「・・・・・そう・・・・・残念」

結局煙まみれの部屋では話にならないと、3人は身も心もぐつたりしながらネネの部屋を後にしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8432t/>

プラッディ・ドール

2011年12月31日22時46分発行